

本邦地理詳説

本地の財政は、總督府に於て、獨得の間整理すべき規定なれど、我が占領後日尙
淺く、且つ施設修正及び新事業多きを以て、勢ひ補充金を國庫に仰がざるを得ざ
るなり、然れども現今稍々生業の發達と共に自由を得たれば、向後數十年に於て
は、全く獨立して、財政の整理をなし得べきなりとす、今本地歳出入及び其の科目
を列擧すると左の如し。

年度	明治三十四年決算	三十五年決算	三十六年現計	三十七年豫算
歳入	一九、七六六、三三四	一八、七七二、〇七五	一九、九六〇、八六一	一八、八四九、六四一
歳出	一九、三六三、七五六	一八、四〇六、八〇五	一九、一〇九、二二二	一八、五四二、〇三〇

歳入科目 (明治三十七年豫算)

内 地 稅	二、五〇三、七八六	海 關 稅	一、五三九、五七五
噸 數 稅	一三、一二三	官業及官有 財產收入	九、七七四、九四四
印 紙 收 入	九一、一九四	諸免許手数料	四、七五四
雜 收 入	一〇八、八八二		
合 計	一四、〇三六、二五七四		

臨時官有物拂代	一七、二六九	補充金	四、七九六、一一五
前年度繰入金			
合 計	四、八二三、三八四圓		

總計 一八、八四九、六四一圓なり

歳出科目 (明治三十七年豫算)

臺灣神社費	一八、〇〇〇	總督府	六七一、九七七
法 院	三三五、三六一	地 方 廳	六九七、五二八
警 察 費	一、六九〇、九三五	警察司獄傳習所	九七、九六六
監 獄 費	五四三、〇一九	醫 院	二五八、四二八
醫 學 校	二二八、〇四〇	教 育 費	一二八、〇二一
稅 關	二七九、七三五	遞 信 費	一、〇三七、七〇七
測 候 所	二七、六七三	航路標幟費	五四、三九六
海港檢疫費	二五、一九八	船路海員費	一一、六三四
電說交換局	四六、八九九	官設鐵道事業費	八二一、一九〇

本邦地理詳説

專賣所	四、六〇一、二九九	歳入經常部(繰入)	一、三五〇、〇〇〇
印紙類諸費	九八	諸拂戻及缺損補填金	八、〇〇〇
罹災救助基金補助	五〇、〇〇〇	豫備金	四〇〇、〇〇〇
合計	一三、一九三、一一四		
臺灣神社鎮祭費	九	特別事業費	三、五〇〇、〇〇〇
事業費	五四七、一七七	糖業改良及獎勵費	一四六、三五七
外國博覽會出品費	三六、〇〇〇	獸疫豫防費	一五、〇〇〇
臨時衛生費	四〇、〇〇〇	勸業費	二四〇、〇〇〇
編書費	一五、七三二	補助費	六六七、〇〇〇
官設鐵道用品資金	一〇〇、〇〇〇	ベスト病防遏費	四一、六五〇
合計	五、三四八、九一六		
總計	一八、五四二、〇三〇圓		

尙ほ此等の外、地方税の歳出入ありて、總額収入は、三、四九四、九五六圓(明治三十五年豫算あり)。

二二九 交通

本地尙ほ清國に屬せし時は、交通の機關甚だ不完全にして、只南北に縦貫せる三條の大道と、東西に横斷せる二條の大道ありしのみ。然れども一度び我が版圖に歸せし此の方、當局者は、銳意斯道の爲め盡力し、加ふるに軍隊の力に依り、開通せし大道ありて、實際上實に効用大なり、鐵道は基隆より南方恒春に達すべき縦貫鐵道は、着々歩を進め、今や將に相連絡せんとせり、其外二三の短線ありて、交通の便甚だ利あり、其他人力車、獨輪車及人肩の制ありて、専ら運送の便を計れり、海運は、大阪商船會社の臺灣東廻線、及ひ西廻線ありて、各港に連絡し、又た内地との間、基隆直航線、宇品經過基隆線、東廻沖繩經過打狗線、及西廻沖繩經過打狗線の四條航路、并に支那へ通すべき安平香港線、淡水香港線あり。海底電信は、三條ありて、一は那覇より内地に、一つは支那清國に、他は澎湖島に連絡せり。

二三〇 産業

本地は、從來清國に隸屬せる間、生産業頗る不振の状態にありしも、我版圖となりし以來、拓地殖民の企業を起し、銳意専力斯界の發達を促かし、主に農業に力を

本邦地理詳説

求むが如し、是れ蓋し地味肥沃にして、全土の西半殆んど耕作に適せる所以なり。然れども殖民拓地の政策未だ半ばに達せざる今日産物の寡少なる又止むを得ざる所、今左に各業に關し大略を述ぶべし。

農業 土地平坦肥沃なると、氣候高温なるは、以て農業の發達を促がす最大原因にして、且つ近時文明の利器を用ゐ、斯業の爲め、大に計畫し、今や一八九六、九三一人の農業者と、五十餘萬町の耕地あるに到り、産物従つて見るべきもの多く、其主なる者は、米千萬石、落花生、甘藷、豆、麥、粟、胡麻、黄麻、茶、烟草、藍、蘭及甘蔗等にして、米は一年二回の收穫あり、蓋し米質頗る下等にして、内地人に適せざるが如し、茶は一年七八回の摘茶收穫ありて、其産額少なからず。

明治三十五年度

米	五、六四二、八四六石(粳米)	甘藷	五〇一、一六〇、二九二石(以下倣之)
落花生	一〇八、九〇七	豆	五五、三一一
胡麻	二五、〇八八	麥	二三、三七六
粟	五九、八一九	茶	四七、二一一、四三五斤(以下倣之)

藍山藍大青	一九、二〇一、三三二	胡麻	一、六五八、七二八
藍木藍小青	一、五六四、八七八	烟草	八二七、四五〇
黄	五三三、八二七		
蘭			

尙ほ農産製品として、製茶、製糖の業尤も盛大にして、茶は淡水附近を中心に、北方の地總て行はれ、殊に烏龍茶の名世に高く、總産額一二、七六四、一二七斤あり、砂糖は、原料を甘蔗に仰ぎ、別れて竹蔗と、赤蔗とあり、企業は、本地到る所に行はれ、總産額砂糖を合せ、一〇三、四一一、〇九〇斤あり、其他製藍に三、八六六、九二八斤、落花油製品ありとか。

林業 地形の關係氣候高温なる爲め、熱帶性植物鬱林をなして、繁殖し、其の種類頗る豊富にして、従つて産出多し。樟の外、椰樹、檳榔子、榕樹、竹、松等ありて、主として、木材とし、輸出せり、中に樟は、本島主産物たる樟腦の原料として、獨り本島産物の主位たるのみならず、又世界産額の殆んど六分の五を占め、其の産額腦油を併せ、五、五三六、八七七斤ありて、内樟腦は、三、一四八、七四二斤あり。政府の專賣に屬し、主として、本島の北部中部に出だせり。

水産業

四周海水に瀕する本地にして、甚だ不振の状態に陥り、只南方澎湖島附近に於て、稍々其の一斑を見るべく、鱈、鱒、鯉、鮭等を産し、其他本地の内部に牡蠣の養育所ありて、總産額五三八、〇一〇圓、尙製造物に一四三、六九九圓あり、製鹽業は、甚だ微々たる有様にして、其の製造方法も、亦内地と大に趣を異にせり、斯業は政府の專賣に屬せり。

礦業

現今調査の未だ充分ならざる結果、尙ほ礦層、礫床脈を見出す能はず、加之採掘の方法甚だ不完全なれば、不振の状態に陥れり、石炭は、基隆の附近に、砂金は、淡水河の上流に、硫黄は、大屯山麓の近傍に、之れありと雖も、其の産額何れも少量なりとす。

牧畜業

本地に於ける牧畜事業は、未だ盛ならず、只支那人は、好みて家豚、家鶏を飼養し、蕃人は、山羊を養ひ、其他水牛の飼養稍々見るべきのみ、即ち黄牛は、牝牛合せて、七七、〇六九頭、水牛は、牝牛合せて、一七八、七四六頭、豚は、牝牛合せて、七七九、一七九頭、山羊は、牝牛合せて、一〇四、九九八頭、馬は、僅かに、八二頭にして、家禽は、凡そ三百萬羽ありといふ。

工業

本地は、未だ斯業の發達企設を見ず、只僅かに日常使用品として、器具を作るか、又蘭蓆、籐細工、芭蕉布、木心紙、鳳梨絲等を製するのみ。

商業

本地内部の商業、甚だ不振の状態にありと雖も、外國貿易は、頗る盛大なり、是れ蓋し古來支那人の來りて、取引買賣すると共に、西歐人の來りて、此地によるもの多く、今や東洋の貿易一般、隆昌に趣くに到り、本地の貿易も、亦著しく發達旺盛となりぬ。

本地開港場は、基隆、淡水、港安平及び打狗なりしが、後ち特別開港場として、舊港鹿港、後壠、梧棲、東石、東港、蘇澳港及び媽宮の八港を加へき、就中通商貿易の盛なるは、淡水、安平、梧棲、東石等なりとす、而して本地主なる輸出品は、茶類、米、砂糖、樟腦等輸入品は、阿片、支那綿布、烟草、豚石油等にして、其取引貿易は、支那を以て第一とし、輸入の八分輸出の五分を占め、香港、佛領印度之れに次ぐ、今貿易の總額、及輸出品價額類列を擧ぐれば、左の如し。

年次	三十四年	三十五年	三十六年
輸出	八、二九八、八〇〇圓	一三、八一六、八六八圓	一一、〇七八、三三一圓

本邦地理詳説

輸入物	二、八〇九、七九五圓	一〇、一〇〇、五三三圓	一〇、七七二、三七一圓
合計	二一、一〇八、五九五圓	二三、九一七、四〇〇圓	二一、八五〇、六九二圓
輸入超過	四、五一〇、九九五圓	三、七一六、三三六圓	三〇五、九五〇圓

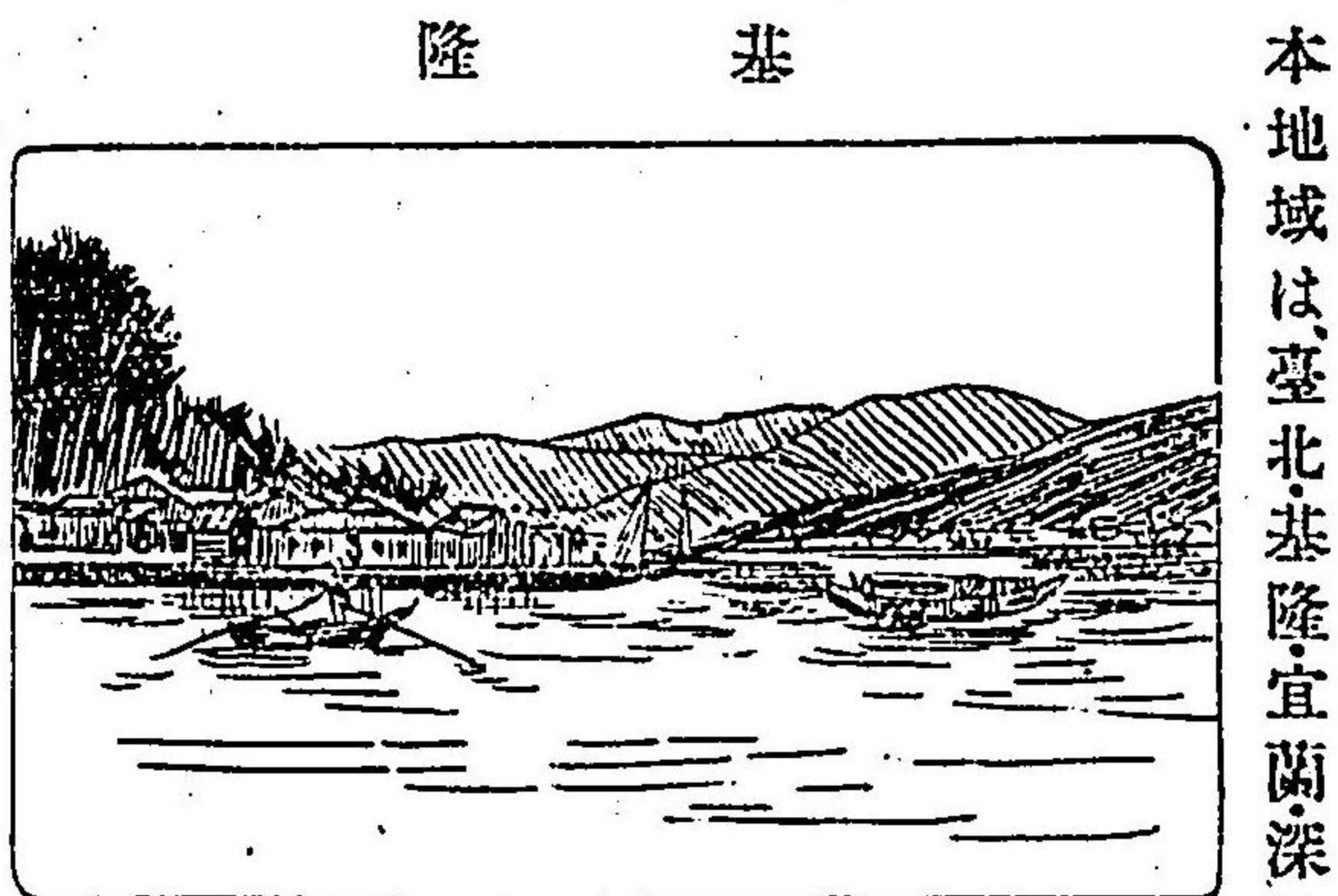
輸 出 之 部		輸 入 之 部	
種 類 別	三 十 六 年	種 類 別	三 十 六 年
穀物及種子類	九五四、二四八	穀物種子類	一、四三一、七六四
菜 果 類	一八七、五〇五	菜 果 類	一六八、七九〇
砂 糖 類	二二〇、三六八	砂 糖 類	九四、七二三
茶 類	五、九七六、八一七	烟 草 類	二九八、一五九
魚 類	一九、九一九	飲 料 類	三六、一二三
其他飲食物類	五九、五二〇	海 產 類	一四五、五三一
藥種製藥染料類	二、六〇四、一六三	其他食物類	一、二三六、七七七
紙 類	三四、六七五	綿 布	一、一一七、八八五
苧 麻 類	五〇一、三二二	絹布及其製品	一三九、六三一
角 皮 貝 殼	一一一、一二五	竹木材及其製品	五四七、二一五
毛類其他雜品	四六五、五三二	豚	三七〇、九六二

區域

基隆

第二十章 臺灣島地方諸誌

二二二 北部區域



基隆

第二十章 臺灣島地方諸誌

本地域は、臺北基隆宜蘭深坑新竹桃仔園の六廳を含み、總面積三一二方里九二にして、人口凡そ八七〇、七〇八人あり、域内中央及び北部に、山脈山麓相疊立すと雖も、海岸の地、概して曠野耕作に適し、殊に茶樹の栽培盛んなりとす。基隆は、一つに鷄籠と稱し、臺灣の北端本地の門口に位し、基隆廳稅關一等郵便局所在地主要の開港場なり、内地との間定期航海あり、又た臺灣鐵道の起點なれば、水陸共に至便なり、只港口北に開くを以て、西南風は安全なりと雖も、東北風は防ぎ難く、且つ港内暗礁伏在し、波濤荒く、潮勢急なれば、小船の碇泊に適せず、現時築港工事中なり、港口要塞

臺北市

本邦地理詳説

の設けありて砲兵一大隊駐在せり。町は港の南にありて商家櫓を並べ商況繁盛にして人口凡そ一萬五千人あり市巷總て汚穢特に雨天の日は泥土覆り往來

困難なりと。

町の近傍石炭及砂金を産す三豹岬は明治二十八年五月三十日我が征軍最初の上陸地にして北白河宮殿下征討記念碑あり。

臺北市は本地の首府にして大山科嶺河新庄河との會合點淡水河に臨み總督府の所在地東京を去ること五百九十六里餘人口八萬餘あり市の東北西山嶺を繞らし南方は平坦曠地に連なり少しく北方に偏在すれども基隆淡水の二港を控え其の間鐵道の布設ありて交通上甚だ便なり市は城内艋舺及大稻埕の三部に分かれ城廓は支那古風式に倣ひ石壁を以て圍まれ凡そ一里餘殆んど四角形をなし南に二門東北各々一門を構え往來に便ならしむ城内には總督府を初め臺北廳



臺北市

艋舺

大稻埕

淡水港

淡水港全景



第二十章 臺灣島地方誌

覆審院地方法院一等郵便局臺灣國語學校守備隊第一混成旅團司令部等ありて市街廣し且つ清潔なり艋舺は城の西外門にありて商家豪店連櫓し市巷殷賑なりと雖も市街總て陋穢なり。

大稻埕は又た新街と稱し城北門外にありて淡水河に莅み烏龍茶の取引多く商業頗る盛んなり此地に外國人の居留する者多く領事館商館等の高厦高樓ありて市況活潑なり。市に近く官幣大社臺灣神社あり明治三十二年の創建にして大己貴少彦名命大國魂命及北白河宮殿下を合祀し境内廣大清潔にして神威甚だ嚴かなり。

淡水港は淡水の河口にあり市街を滬尾と稱し基隆と共に本地北部の開港場なり臺灣主産なる茶を初め米樟腦等の輸出頗る盛にして税關の設けありて船舶の出入常に絶へず然れども港内水淺く大船

本邦地理詳説

を泊するに足らざるは甚だ遺憾とする所にして、近時築港の計畫あり、街は港の北岸に位し、背に山を負ひ、前は川流に莅みて、遙に外洋に對し、尺吳寸楚の間歸帆を望む所、風景頗る佳なり、總て巷衢井然商業殷賑にして、人口凡そ七千餘あり、町の東北大屯山には、硫黄を産し、又附近に北投温泉あり。

桃仔園
枋橋町

桃仔園は、桃仔廳の所在地にして、附近茶の栽培盛にして、恰も内地に於ける宇治の如く、平原丘陵悉く茶園あり、従つて製茶の業盛なりとす、附近枋橋町には、臺灣第一の富豪林維源氏の邸あるを以て其名特に著る。

新竹町

新竹町は、特別開港場舊港と相連絡し、米穀の集散地なり、市街は平野の中に位し、四周石壁を圍らし、四ヶ所の樓門あり、今は新竹廳地方法院の所在地にして、市街清洒商家櫛をたらね、商況盛んにして、人口凡そ二萬あり、町に近く、海岸は一帶白砂青松つらなり、風景頗る宜く、又た北白川ノ宮殿下の尤も苦戦し給へる尖筆山の古跡あり。

深坑町
宜蘭町

深坑町は、深坑廳所在地、山間の一邑都にして、人口凡そ一萬人あり、附近製茶の業盛んに、又炭礦採掘の舉あり。宜蘭町は、東北部第一の都會、人口凡そ一萬六千

蘇澳港

人あり、市街繞らすに城壁を以てし、四方に城門を設く、宜蘭廳此所にあり、市は冷水溪に莅み、運輸の便宜くして、商況繁華なり、附近の地耕作に適し、藤麻の産出甚だ多し。

蘇澳港は、冬季北風を避くる能はずと雖も、港内水深く、以て巨船大舶を容るゝに足り、東海岸第一の良港と稱す、海上龜山嶼横はり、附近漁業の利多し。

二二三 中部區域

本地域は、苗栗臺中彰化南投斗六の五廳を含み、總面積四六二方里八七にして、人口凡そ八八四、六〇八人あり、域内の東部は、中央分水嶺に接し、土地頗る高く、且つ荒瘠なりと、西部平野に到れば、河川所々に流れ、其の流域廣く、地味肥沃にして、耕作に適し、所謂臺灣米甘蔗甘藷甘蔗等は、此に産出す。

後壠町
苗栗街
梧棲港

後壠街は、後壠川の河口に位し、開港場の一なり。苗栗街は、苗栗廳の所在地、古來樟腦產地として、其名特に著る、大甲街は、四圍平野開け、耕作盛なり。梧棲港は、一開港場にして、支那との貿易盛に行はる、塗葛街は、新起の開港、錨地船舶の出入繁く、將來大に有望なり。

臺中市

臺中市は、元と臺灣府にして、今は臺中廳一等郵便局、地方法院、臺灣守備混成第一旅團司令部あり、臺灣島の中部に位し、人口凡そ一萬餘、輕便鐵道によりて、塗葛街と相通じ、運輸の便あり、近傍大肚溪に臨み、風景頗る佳なり。

彰化街

彰化街は米産地の中央に位し、其の集散取引盛大にして、商況頗る活潑、人口凡そ一萬五千あり、市街又た石壁を繞らし、四門四通の便あり。鹿港は、開港場にして、彰化の門口をなし、米穀の輸出行はれ、港内支那船常に輻輳し、市況繁賑、人口凡そ二萬餘あり。東方山間の地に埔里社あり、漢人熟蕃の雜居地并に内地に入る要衝なり。

鹿港

埔里社

番控街

番控街は、西岸の小一巷街にして、南投は、南投廳の所在地附近多く、藍を産す、北斗街は、濁水溪と北斗溪との中間に位し、南向西海道路の要衝、人口凡そ六千餘ありて、商況稍々盛なり。斗六街は、一に雲林と稱し、斗六廳の所在地なり、此地屢々土匪の襲撃を受くる事多く、明治二十九年有力なる土匪蜂起し、總督府之れが平定に苦しみしは、人の能く知る所なり。街の東南雲裡に翠黛我國第一の高山新高山聳立せり。

斗六街

一三三三 南部區域

本地域は、嘉義、鹽水港、臺南、蕃薯寮、鳳山、阿猴、恒春の七廳を含み、總面積五二一、一四にして、人口凡そ一〇五〇、一二八人あり、域内の東境、中央分水脈聳え、高地なりと雖も、西南平地に到れば、地味肥沃、耕作に適し、殊に甘藷の産多し。

嘉義市

嘉義市は、之を諸縣と稱せしが、林爽文の亂後、今の名に改稱せりと、嘉義廳の所在地にして、人口凡そ二萬有餘、四周城壁を圍らし、通するに四門を以てす、附近地開け、耕作盛にして、米、砂糖の産多く、市街繁華なりとす、近傍勝景に富み、嘉義八景の名世に高し。東石港は、開港場の一にして、米、砂糖の輸出盛んなりとす、鹽水港街は、鹽水溪に瀕し、鹽水港廳の所在地にして、市況又た繁盛なり。

東石港

臺南市

臺南市は、昔時本島第一の都會にして、元と和蘭人の本據地、鄭氏の定都たりし所、臺灣と云ひしが、後臺中、臺北の設置せられしに及び、改めて臺南と稱せり、府城の周圍凡そ二里餘、四大門、三小門を設け、交通に便ならしむ、今は内部に臺南廳地方法院、一等郵便局、臺灣守備混成第三旅團司令部等あり。市街は、城外にありて、形ち長方形をなし、長さ一里餘、豪商富豪櫓を並べ、海岸近き所、商業甚だ盛にして、

安平港

橋仔頭

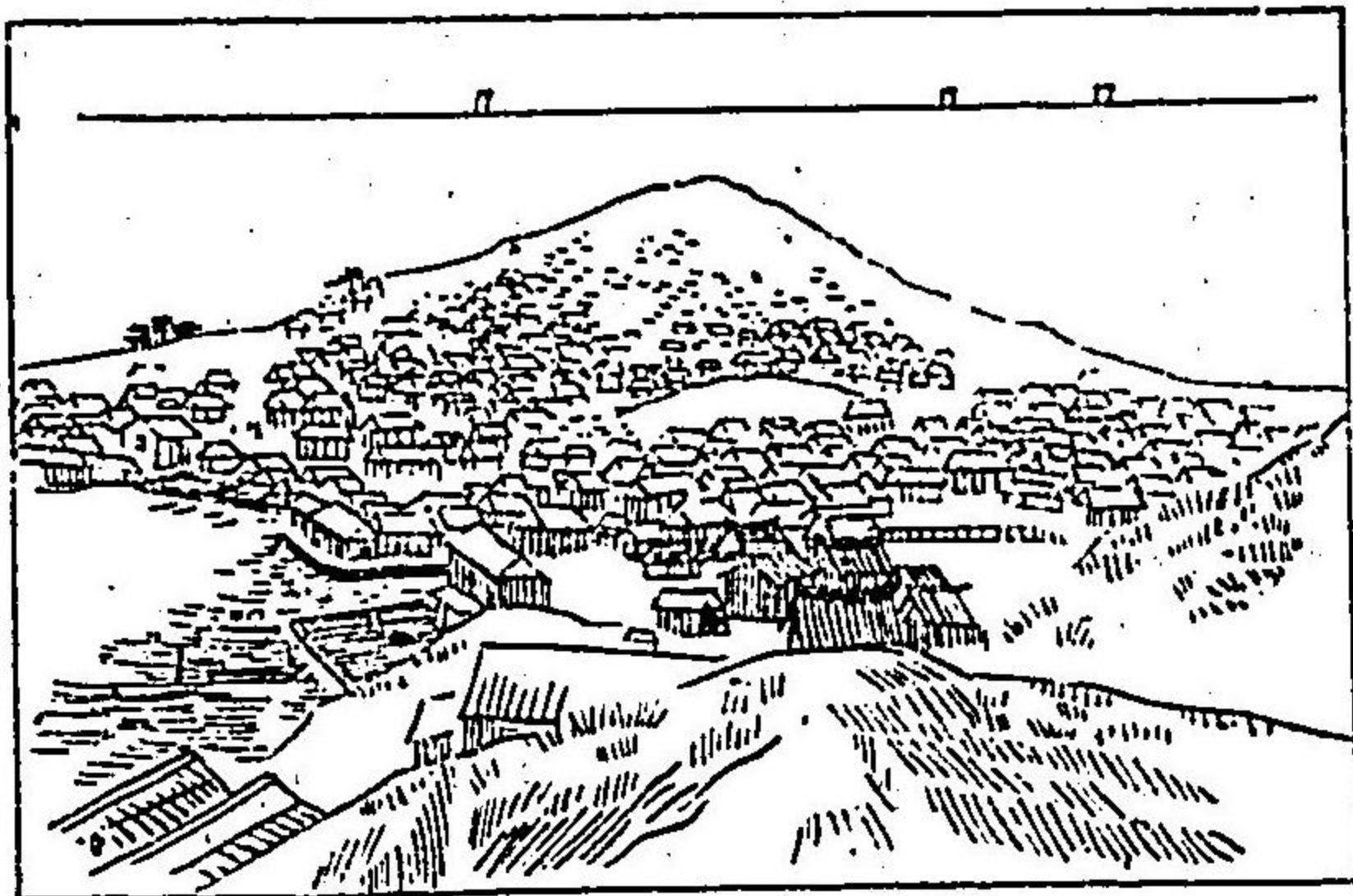
打狗港

本邦地理評説

砂糖米穀の輸出又阿片其の他雜貨の輸入取引活潑人口凡そ五萬四千人あり。

安平港は臺南の西方弱其の間輕便鐵道を通じ本地淡水港に次ぎ臺灣南部の

打 狗 港



要港貿易場にして年々三百五十萬圓餘の輸出あり實に本港は臺南の門口附庸港と云ふべきもの百貨輻輳し砂糖の輸出尤も盛大此地に税關の設けあり然れども港口砂洲多く波浪常に高く殊に南西の風を避くる能はざるは甚だ遺憾なりとし貿易額従つて少額たるは又た止むを得ざる所なり。

橋仔頭は臺灣製糖會社の在る所近傍甘蔗の栽培盛んに所謂一望千里皆甘蔗ならざるはななく其の丈二間餘ありといふ。打狗港は一名旗後又崎後とも稱し開港場の一なれど港底淺く投錨巨船の碇繋に適せずされば砂糖輸出の時の外は甚だ寂寥を覺え貿易年々

鳳山

阿猴街

蕃薯寮街

東港

恒春街

衰頹する傾向あり。

鳳山は鳳山廳の所在地古來砂糖の産として其の名世に高く商況盛んにして人口凡そ七千あり。阿猴街は阿猴廳の所在地にして附近米産頗る多く蕃薯寮街は又蕃薯寮廳所在地近傍蕃社甚だ多し。

東港は下淡水河の河口にあり開港場の一なりしが米産地の中心にあれば米穀を輸出すること多く市況従つて販賣人口凡そ七千五百餘あり。

恒春街は本地の最南我國の極南にして元と瑯瑤猴洞と稱し附近蕃社多く中に牡丹社は琉球人の漂着せし者を虐殺せしかば明治七年我國軍帥を出たせり以後恒春と改め今は恒春廳守備隊の所在地人口凡そ二千餘あり此地極南に位し氣候高温四季を通じて春の如し只時々大風襲來し害を蒙る事甚し南岬鷺鑿鼻には燈臺の設けありて其構造の宏大なる東洋第一と稱せらる。

二三四 東部區域

本地は臺東一廳を含み總面積二四八方里にして人口凡そ一二三二一人あり城內總て丘陵高臺にして地味瘠せ只卑南溪附近稍々曠野を見るのみ。

本邦地理詳説

花蓮街は、花蓮港を控え、東洋岸の中部に位す、近傍廣漠たる平野相連なり、土壤肥沃、將來耕作の適地なり、此地の北方沿岸所謂世界第一、絶險峭壁と稱すべく、高さ千尺餘に到り、頗る壯觀なり。

卑南街は、卑南大溪の下流にあり、東洋唯一の都邑にして、臺東廳の所在地、人口凡そ一千五百人主として、農業に従ひ、麻胡麻を産出す。海上火燒島は、周圍八里餘、全島石激岩よりなり、沿岸奇景に富む、住民凡そ五百人、皆土人にして、泥土の家屋を作り、本業を以て葺く所、頗る野蠻、以て土人蠻族の狀態を見るに適せり。紅頭嶼は、周圍十二里餘、住民凡そ一千人あり、山野到る所、芭蕉、甘蔗、檳榔、樹繁茂し、土人多くは、漁業に従事せり。

二三五 西部區域

本地域は、澎湖一廳を含み、總面積一三方里七三にして、人口凡そ五三、八七六六あり、域内澎湖島を始め、漁翁白沙等、大小五十餘の小島嶼よりなり、地勢一般平坦なれば、強風吹き、雨量少なく、飲料水缺乏し、又た樹木繁茂せず、只だ矮草を見るのみ、人民は多く農業に従事せり。

媽宮は、澎湖港に在り、我國南門の要地にして、澎湖廳、水雷布設部、守備隊、要塞砲兵一大隊、憲兵所等の所在地、人口凡そ三千五百人あり、港は澎湖漁翁、白沙の三島相抱合して、一大港を形作り、港内廣く、且つ深く、大船巨舶を容るゝに足る、船舶の出入常に絶えず、實に臺灣島第一の良錨地といふも、敢て過言にあらざるなり。

本島重要事項

- 第一 本島氣候概して高熱、往々マラリア熱病流行する事あり。
- 第二 樟腦は、本島の特産物にして、獨り我が國の主産物のみならず、又は世界産額の凡そ六分の五を占め、又た茶、砂糖の産出亦多く、共に本島三大産物と稱せらる。
- 第三 米は、一年二三回の收穫あり、蓋し米質頗る不真にして、内地人の食料には適合せざるが如し。
- 第四 新高山は、本邦第一の高山にして、又た玉山と稱す、是れ蓋し終歲雪封之を眺めば、太白の如く、頗る愛すべき尙玉山の如しといふ意味に出でし者ならん乎。
- 第五 恒春は、本邦最南の都邑にして、氣候高温なるべきに、却て然らざるは、海風之を調和するに、基固するものなり。
- 第六 本島の河流多く、河床深ふとして、河峽を作り、且つ降雨烈しければ、往々溢量洪

本邦地理詳説

水を起す事あり。

第七 本島は、明治二十七八年日清戦争の結果、我が有に歸したる事、並に北白河宮殿下金枝玉葉の御身を以て、御征臺なされし事、吾等國民の尤も記憶すべきなり。

第八 本島の生業、現今尙ほ不振微々たるの狀態なれど、天然の生物多く埋藏せらるゝを以て、向後幾年間にして、大に發達盛況となるべきなり。

本邦地理詳説終

附録 權太島略誌

第一章 發端

歐亞東西兩洋交通の發端は、遼遠として詳細を知る能はずと雖も、其複雑頻繁となりしは、正に是れ十三世紀に於ける支那元朝時代なり。先是歐洲の宣教師は、東國に來りて誘説する者多く、從つて地中海を世界の中心とせる舊思想は、忽然と脱却し、代ふるに東方に無邊の大陸あるを知れり。殊にマルコロポロ東方見聞録を編出するや、極東諸國就中日本の富饒なる事を讚美し、大に歐人をして遠征心を勃興せしめ、同時に東方探検の事業に従事するの端緒を與へぬ。既にして突厥人は小亞細亞を併呑し、威を東方に振ふに及び、地中海の東岸悉く其配下に屬し、埃及の市府アレキサンドルの印度貿易は、漸次頽廢するに到り、茲に印度に達すべき新路を開設する必要と急務は、歐人の輿論となり主義となりしが、先きに支那より傳來せし磁針の彌々完備すると共に、歐人航海者をして、遠く

大洋に航する企業を奮起するに到れり。

當時、葡萄牙の王ヘンリー四世は、夙に航海事業を奨励し擴張せんと欲し、十五世紀の初期頻りに船を出だして、亞非利加の西岸を探検せしめ、カナリー島、アゾール島を發見するに初まり、一四九八年バスコデガマ亞非利加の南端喜望峯を圍航し、印度カルカッタに到達するに際し、舊來の交通陸路は全く衰頽し、同時に海上の航路は益々發達し、商業は葡萄牙人の手に歸しぬ。次いで西班牙人は、さきにコロンバスが亞米利加大洲を發見すると共に、西方に航し、東洋に行かんと試み、一五二一年マゼラン南米の東岸に沿ひ、マゼラン海峡を通じ、茫々たる太平洋に出で、ヒリツピン群島の一セバ島に到着する快事に接し、氏は土人の爲めに殺害に逢ひしも、爾後西班牙は、數次遠征隊を出だし、益々探検せしめしかば、葡萄牙人と共に、彌々東方の商業權を掌握するに到れり。

斯くて西歐諸國、英、蘭、佛、葡、も、之に倣ひ、船を出し、遠征隊を送り、商業貿易に従事せしめたり。時に歐洲は、基督教新舊兩派の軋轢激烈となり、舊派の一派ゼスイツト派は、新教派の爲に失ひし勢力を、歐洲以外に求めんと欲し、東西に奔走し、名

を商業に託して、宗教を擴め、或は宗教を基とし、國土を奪掠せんとするあり。今や世界到る所、歐人其足を納れぬ。即ち我國歐人と交通貿易の端緒正に此時此際なりき。

如此く、西、葡、英、蘭、諸國海路を利用し、東洋に貿易する間、露西亞國は、専ら陸路に據り、西比利亞を占領し、次で極東に向はんと欲せり。是より先き、元朝時代、拔都の西征ありて、今の露國モスコ一附近は、元政の治下に配屬せしが、後元朝の衰微と共に、モスコ一の太公イボン三世之に乗じて、恢復の旗を上げ、一四一〇年終に露國は獨立し、以來月に務め、年に増張し、威を東方に振はんとせり。時に露國の隊商は、ハトラ及波斯と共に、定期の往來ありて、互に通商貿易を行ひしが、常にボーン河畔コサツク兵に妨害せられ、斯業發達する能はざりしかば、露國兵を派して、之を征定併吞するに及び、コサツクの一統領ヲモフイク、東方西比利亞に走り、チユラ河畔チユーメンに於て、シヒル汗クチユームを破り、其地を得て、露帝に献上し、前非を乞ひしが、既にしてチモファイフは、クチユームの爲に破られ、次いで死するに逢ひ、當時クチユームの威勢、チユラ河東に於て熾盛なりき、於是所露人東方に出

で、クチムを倒し、一六一九年、エニセイ河畔エニセイスク、一六三二年、レナ河畔に、ヤクツクを建て、更に東進して、オコツク海を渡り、カムチャツカに出で、或はバikal湖に行きて、イルクシユを建て、次で黒龍江を探検し、子ルチンスクを築き、以て、徐ろに滿洲に強迫し、支那中原に侵入せんと欲せり。

斯く露西亞國の東方に毒爪を伸張せんとする主因は、國祖ビートル大帝の主義、國土擴張論を貫徹せんと共に、露國の位置北歐に偏倚し、氣候寒冷なり、加之海岸なく、例令是ありと雖も、良港に乏し、故に其不凍良港を得んと欲する野心と、熱望は、日夜絶えず、事に乘じ、隙を伺ひつゝ、西比利亞に進み、千辛萬苦を排し、極東海岸に到らんと欲するは、斯道の主なる導心線なり。故に十七世紀の末カムチャツカに達して、廿三の部落を作り、十八世紀の中葉ベーリング海峡を渡り、アラスカを容易に占領し、次いで一方南下し來り、千島列島我蝦夷島の北方に出で、他は露將軍ムラサエフ黒龍江を探究し、同河口に一城を築き、尙近隣を征定するに及び、終に一八五八年愛琿條約を締結し、黒龍江州沿岸州を占領するに到れり、時に樺太島の北半清國支那に屬せしが、此所に到り、露國の有となれり、十五六世紀歐

人の航路を發見して、船を東西に出だし、國土を捲吞し、又歐洲國內宗教の内訌ある時に當り、翻て、我國狀を見れば、足利の末葉にて、戰國時代に入り、英士傑將各地に割據し、轉戦して、互に、英を競ひ、蒙を争ひつゝありき、時に一五四一年葡萄牙の船は、我南土大隅種子島に漂着せり、是れ歐人にして、日本到來の發端なりしが、爾後葡萄牙は年々貨物を搭載し、九州諸港に來り、通商貿易を營み、次いで一五八〇年頃西班牙人亦來り、我平戸に通商を開き、貿易を行ふに到れり。

斯くて、我國內亂は織田信長により中國平定せられ、豊臣秀吉ありて天下は統一せられしが、其間西歐人の來訪益々繁く、從つて基督教は、滔然として入り來りて、流行し、諸士夫之を信仰歸依する者多く、秀吉爲に再三之を禁斷せしも止まず、後秀吉薨去し、關ヶ原決戦ありて、世は徳川氏の有となり、幕府は江戸に開設せられたりしが、家康は秀吉の朝鮮征伐に鑑み、専ら通商貿易を奨勵し、朝鮮、明國と交通するが、一六〇〇年、和蘭船の堺浦に來るを初めとし、呂宋、英國、安南、東蒲等の船舶陸續と來航し、又我商人幕府の印朱を乞ひ得て、大船を作り、海外に貿易し、或は遠く亞米利加大陸に航行する者ありき、此當時基督教益々隆盛に赴き、九州よ

り中國京畿を経て東國に波及し、時に宣教師の倨傲無禮なるあり、家康秀吉に倣ひ、之を嚴禁せんとせしが止まず、其勢當るべからざりしが、終に宣教師は宗教名目の下我國を奪取せん企圖計畫あるを發見し、茲に斷然之を嚴禁し、漸く其衝路を絶ちしが、後家光に到り宗教を堅く禁ずると共に、人民の海外航通を禁じ、或は外船の來航を謝絶し、以て百方基督教の傳播を防障し、此所に全く鎖國保守主義を取り、只和蘭船のみ島原の亂我れに應援せし功勳を以て、依然通商を許され、歐人の長崎互市は、和蘭國一手に歸し、我國は保守主義と鎖國主義の下に、再び亞細亞の東北太平洋の西北孤島となりぬ。

前陳の如く、歐洲諸國就中、露國人民は、積極主義を以て銳意極力して西比利亞を平げ、滿洲に出でんと欲するに際し、我國は保守となり、鎖國主義により、長く太平の夢を結ばんと欲せり、然れども、此二者の主義は、端なく十八世紀我文化年間衝突し、此所に樺太問題は勃然として起り、露國南下史の一節となり、日露戰端の一遠因となりぬ。

第二章 樺太島歴史

時は是れ文元の初め、我邦人の絶えて目だに觸れざりし、外國船帆影は、我國の東北陸州の海岸遠く、尺吳寸楚の間に顯はれ、其怪訝の帆影を見し漁民は、一方ならず、恐怖と怪疑を生じたりしが、其船體は未だ岸邊近く來らざりき、次いで、明治七年怪しき帆影、露國の船は突然千島列島得撫島附近に來り、臘虎海豹海獵等を漁すると共に、上陸して人家を犯かし、財寶を奪ひ、暴行をなして去れり、斯くて、安永七年露船は根室港に來りて通商貿易を乞ひ、續いで寛政四年十月露人ラツクスマン我漂民幸太夫磯吉兩人を伴ひ、東蝦夷地に來り、通商貿易を乞ひ、且つ江戸の地に赴かんとせり。

於是大目付石川忠房、村上義禮、其地に到りて應接し、通商は國禁なりとして之を拒絶し、改めて長崎に來るべきを含め、信牌を與へて、勿々之を歸さしむ、是即ち鎖國以來外船來航の始めにして、是より東北の地、蝦夷の海岸、鯨波荒く、邊境急にして、羽檄南北に走せ、太平酣夢の徳川幕府、此所に端なく、北土警備に全力を注ぐ

べき時となり、北邊の人民亦一日の安寧なく、其結果を猜疑し迷霧の裡に月日を経過する事となりぬ。

如斯くして、一旦退けられたる露國は、文化元年九月使節レサノツトに國書及び方物を齎らし、長崎に來り、前年ラツクスマンに與へられたる信牌を證とし、又我漂民四人を送致し來り、且奉行の指揮を待つて江戸に到り、將軍に謁して、通商互市を乞ひし旨時の長崎奉行肥田豊後守頼常より注進なりしかば、幕府即ち目付遠山金四郎景晋を使はし、露使と應接せしめ、其國書を受けしに、意甚だ殷懃にして、頗る要を得たりと雖も、神祖以後の國禁通商の許可し難きを告げ、薪水食料等を附與して速かに歸國し再び來るなきを諭す、レサノツト即ち去る、時に文化二年なり、然るに彼れは平然として、長崎港を出帆せしにあらず、一物胸に窺むならむ、直に同港より針路を東北に取り、太平洋を北カムチャカに到り、フオシトフと呼ぶ者を船長とし、自から他船に便乗して亞米利加に歸りぬ、是所に到り、フオシトフトはレサノツトより意を受け、日本が再度の要求を納れず、峻拒せし結果は、終に態度を一變し、文化三年九月二艦を以て突然樺太東海岸に來り、我が

有なる鹽米類を奪略し、尙南下楠溪に到りて米鹽酒類を奪却し、番屋を火き、番卒四人を捕へ亂暴狼籍を極めて去る、初めは温顔にして求め、再度聽かずんば大聲威嚇を以て來襲する方法と政策は、露國の慣手斷なり、況んや時アレキサンドル第一世の代正に此舉に出づ、敢て怪しむに足らず、かくて一度去りたる露艦は得撫島に越年し、翌四年擇捉島内浦に來り再び家財を奪ひ、鹽米其他許多の食品を掠め、暴威を逞ふし更に同島紗那に來りしかば、我が守備隊員舉つて此難に當る、勇戰奮闘防止に務めしも、彼は衆、我は寡敵し難く空しく彼れが勢力に壓倒せられ、時の守備隊長戸田亦太夫憂憤慷慨の内、孤島松葉の下に死去する慘狀を呈しぬ。

さても露人の入寇は我國弘安の役以來の珍事なり、於是乎徳川幕府閣議を開き、對露問題は審議せられ、討議せられたるの結果、終に松前章弘の領地及西蝦夷の地を悉く幕府の直轄となし、以て益々國防守備を嚴固にするの方針を取れり、同時に出來得べけんは、敵を未發に防止し、國體に神嚴を保つ上之を海外に討ち拂ふべきを諸候に命達し、且つ守備防禦に密議せしむ、即ち間宮林藏、林子平、佐藤

信淵近藤守重等對露政策の急務を論じ、必要を説きしは此時代前後にありき。如斯くして露艦の出沒頻繁となり、忽焉と出で、忽焉と去り、其度毎に我が商船を掠劫し土民を害すること甚しく北土爲に騷擾紛亂せる間文化八年露艦チア一十號は來り、擇捉島の諸港に碇泊して薪水を求め、其艦長ゴルーインは皇帝命令の下、千島列島及近海を測量し、前きのフオシトフトの如く海賊的凶行を敢てなさいりしが、積年露人の侵略に遭遇し、憤恨怨怒止まざる我人民、我守備隊は、之をフオシトフトの黨派と見做し、捕へて函館に送り獄屋に繋ぐ事、二年後事なきを探知し放免歸國せしむ、然るに徳川幕府は、此ゴルーインの行動を以て、露國に對する手段を緩除したるにあらず、益々警備を嚴重にすると同時に、血あり涙ある我士民舉つて北天の怪星に向つて研究し、討議せり、時に温厚慎重なる徳川齊昭公は、慨然として立ち露星に對し、意見書を公にし其旨とする所は、我が神州の沿革位置を説明し、國土の一寸たりとも異國に渡すは、我神州の耻辱祖宗の實訓に戻るものとなし、北門鎖鑰を嚴にし、併せて陰然夷賊の膽を挫き、永く窺視を絶つべきにあり、依りて幕府之を採用し、參考として、紛亂混雜の中警備を熱心に行

ひ、同時に人民の渡島を獎勵せしが、時露國は樺太の沿岸測量に着手し、殖民地を開設せしかば、終に樺太島は兩國民の雜居地となり、何れが我が有、版圖たるか殆んど知るべからざるの狀態となりけり。

嘉永六年七月、露國は水師提督ブーチャチンをして軍艦四艘を率ゐ、長崎に來り、國書を捧呈せり、其要三事あり、一和親隣交を修め、二樺太島の境界を定む、三露國の船舶日本の諸港に到り薪水食糧缺乏の器具を買ふを得るにありと、之れと共に露國の兵は、端なく樺太島楠溪に上陸し、亂暴凶行を極め、終に同所に兵營を構へて守備するに到れり、於是徳川幕府は一つに北門の守備を嚴にすると同時に、一つは大目付筒井肥前守勘定奉行川路聖謨等を使はし、ブーチャチンと應接せしめ、談判の舞臺は開かれたり、されど我國使は通商貿易の許し難く我國禁なるを緯として、之を拒絶し、樺太問題は即答すべからず、國書により地理を探求すべきを經とし、之を曖昧の内に去らしめんとせしが、彼提督は暴威にも、日本は樺太を無斷に占領せり、樺太は、露國の屬島なる事を廣言するに到り、我國使最早一步も猶豫讓歩すべからず、斷然談判を中止し、疾く疾く歸國を命じぬ、然れども安

政元年十二月結びたる下田條約は、終に露國の意を納れて、樺太島は兩國國民の雜居となし、境界は尙未だ一定せざりき。

先是露國は我國が樺太の南部地方を開墾し、地を擴め勢力を増進するを見、彼亦其北方の殖民開拓に従事する間、計らず石炭礦を發見し、益々彼れが樺太に對する熱望と野心とを強大にし、無暴にも同島を占領せん事幾度か、されど幕府の之を防禦し之を峻拒するの結果は、彼亦容易に之を實行すべからず、我國は益々國防上北土の關門として同島を重大視し、露國は經濟的價値を以て太平洋に雄飛せん基點より重視し、彼れ一步南すれば、我亦一步北し、後終に兩國の兵士同舎に起臥するの奇觀を呈するに到り、後患の起るべきや必然の事となれり。

安政五年、露國は函館に領事館を設置すべきを幕府に通知し來りしかば、即ち函館奉行弘内下野守をして、領事と交渉せしめ、樺太島に關し協議せしむ所ありしが、同領事は之れ任務外なりとし、之を受納せざりき、翌六年七月に到り、露使ムラビヨフは來りて議を江戸に開き、樺太島と蝦夷島との海峡を以て兩國の境界とし、アラワ、サカリーン漁業權を一定すべき、アニワ港場兩國國民の雜居地と定む

べき、右三ヶ條を以て談判を開始せんとせり、我國即ち委員遠藤但馬守酒井右京亮は之れに應接し、北緯五十度を以て、兩國の界たるを主張し、相互和解せず、再び談判は破裂したり、蓋しムラビヨフが樺太島を占領すべき主論點は、露國先きに清國とアイガン條約を結び、黑龍江洲沿岸洲を得、且樺太島の北方地を得たりしかば、樺太南方の地亦當然、露國の版圖たるべきを揚言したる所にして、我が委員一上一下之を拒絶したりしと雖も、早晚來るべき問題複雑なるべきを豫期し、終に文久元年幕府は大阪、江戸新潟及西海沿岸の諸港開設延期談判の使節を、歐洲各國に派遣する事となり、其序を以て露國に到り同問題を審議せしむ、於是、一月勘定奉行外國奉行竹内下野守を正使に、外國奉行神奈川奉行松平石見守自付京極能登守を副使とし、其他人々之れに従ひて出發せしが、翌二年一行歐洲各國を巡歴し、七月に到り、露都に達し樺太問題を議す、時に露國委員將軍リグナチーフは樺太島を以て兩國國民雜居の地となすべし強ひて之か境界を定めんと欲せば、宜しく宗谷海峡を以てなすべきを主張せしかば、我が委員之を却け、北緯五十度を以て論點とし、談判數回決せず、後更に天然の地形により之を劃定せんと欲し、

此所に約定書を交換しぬ、其要に云へらく、露國は樺太島に關し、從來の如く、兩國民雜居地と定めんと欲す、されど日本政府強ひて之れが境界線を劃定せん事を希望せり、依りて露國政府は、之れが責任と談判を時の沿海州海軍總督シベリア艦隊太平洋諸、港司令官、チガチン知事海軍中將カサケウイムに委任する者なり、同中將は時宜に應じ、日本委員と會合の上協議すべしと、於是我國使節一行は露都を去り、我國に歸り、事の顛末を報告せり、然れども當時我國内外多事、又委員を派遣し、之れが談判をなすべき迄あらず、故に因循其儘に時日を経過せしが、海軍中將カサケウイムは露國の委任を受け來りて、樺太問題を解決せんとせしかど、我國委員の來らず、加之幕府は此事に關し何等の注意通知をなさざりきを以て、彼れ憤然として去りぬ、於是樺太島は最早露國の掌中に陥り、彼れが毒爪に打ち込まれたるの想ひあり、何となれば將來我れと交渉をなし、談判を開くにあたり、必ず胸中此破約怠慢の不愼は窃むべきなり、事に倚り物に應じ、樺太島を占領せんと欲す、彼れが野心と希望は、此所に彌々確定せりといふべし、果哉後慶應三年小出大和守、石川駿河守等を露都に派遣し、樺太島に關して協議する所ありしが、

露國は千島交換問題を提出しぬ、されど我が委員は之を拒み、從來の如く五十度論を主張せしと雖も、談判は再び破裂し何の効なく、只兩國民雜居地たるを繰返して歸國しけり。

斯くて我國徳川幕府は政權奉還となり、日本は明治革新となり、天皇御親政となりしかど、未だ樺太問題は解決せず、従前の如く兩國民雜居地となれり、されば明治元年十二月外務大丞丸山作樂は岡本監輔を樺太島に派遣し、露國陸軍中佐テフラートウ井子と談判せしめんとせしが、同中佐は我が職權外なりとの口實を以て之を峻拒し、談判は成效せざりき、次ぎて明治四年外務卿副島種臣は日本駐劄露國公使ピツオフと共に謀議して、樺太島北部の露領地及財寶器具を購ひ、樺太全島をして我が有たらしめんとせしが、時の開拓使長官黒田清隆は、樺太島に於ける露國の勢力南下の猛進たるを見、早晚兩國の間に衝突あるべきを豫想推理し、寧ろ樺太島を去つて露國に與へ、退ひて千島列島を占守し、北海道開拓に全力を注ぐべきは今日に於て、又將來に於て利益する所あるを觀破し、副島氏の謀議交渉あるに拘らず、極力之れに反對し、自己の意見を太政官に提出せしが、廟

議終に一決して之を採用する事となり、千島交換問題は起りぬ、於是、明治七年政府は海軍中將板本武揚を全權公使となし、露都に派遣せしが、露政府は公爵ゴルチフアコフーを委員とし、談判交渉に従はしめしが、數回の會合幾度の協議は、終に樺太島と千島列島と交換する事となり、明治八年五月七日交換條約は締結し、樺太島を捨て、占守アイトハラムシリマカナルーオン子コタンハリムコタンエカルコ等十八島を我れに得て、茲に過去數百年紛擾混亂の裡我國産問題たりし樺太島は露領となり、名をばサカリエンと改稱し、長く久しく宗谷海峽を以て兩國の境界となしたりき。

然れども此交換と談判は勿論彼我對等の位置平和的締結なりと雖も裏面に入り其内幕を探究するに於ては、露國の奸譎巧妙なる外交の手に、箝入し交換名目の下之を讓奪したる者にして、眞に是れ我國開祖以來の汚點を歴史に印したる也、血あり涙ある我大和民族争か、か之を黙居し輕視すべけんや、然れど時内外多端亦之を顧慮するの隙なかりしか、天運此所に循環し來り、甲辰二月日露戰爭は滿韓の野黃海大連の港灣に開始せられ、皇帥向ふ所敵なく勝たざるなき餘

勇は、乙未七月其餘力を以て樺太島に用ゐ、遺恨三十年彼の暴戾に怨恨を懷きし、我が忠勇の兵士は一舉を以て之を奪還し、僅々二十餘日にして全島を占領し、國民日夜忘るゝ能はざりし怨恨と、朝暮見免がし難き彼れが暴行を此所に消化し、奪還して、神史の缺點を拂拭するを得たるは、眞に愉快にして、多年の愁雲、今日晴れ、屈枉茲に於てか、伸張したりき、斯くて日露の戦端彌々深く、益々酣なるに當り、友誼厚き米國の大統領は、彼我の間に立ちて、媾和の媒介をなすや、我國之に背戾し難く、終に厚意を納れて、北米の一都府、ボーツマウスに日露の公使會合し、數回の談判幾度の讓歩を以て、九月五日媾和條約を締結し、其結果樺太島上北緯五十五度の線を以て、兩國の境界となし、其南部を我國占領地と定め、此所に日露戰爭は、終りて世界の平和は神の御前に告げられたり。

第三章 樺太島地理

一 島名

樺太島の名稱に就きては、未だ詳細知るべからず、或は之れをアイヌ語となし、

古代カモイ神ラフトと稱へ、神の造りなせし海峡の意にして、今の宗谷海峡一面の海の名なりしが、後遂に島の稱名になれりと、又樺太島に居住せる唐人カラヒトを轉訛してカラフトと聞え、終に島名となりしと、支那書には、之を庫葉島と稱し、歐洲にては、サガリエン島(Saghalien)と云ふ、本島名に付き其信頼する根據、何れなるか判然たらず、先づ數學者間の説によりて、第二唐人の轉訛論稍々眞に近かきが如し、次に本島は古代より我國に屬し、アイヌ族は勿論本土の人民渡來し漁業に従事し、楠溪には我行政廳を設置せられしが、徳川氏中葉我が文化年代に到り、露人屢々入寇し、以後數回紛擾を生じ、其間彼我の委員の協議する所ありしも、談判整はざりき、西紀一八五四年に到り、露國清國と共にアイガン條約を締結し、本島の北部を讓受せしが、以て本島全部は當然露領と見做し、我國に謀議せしも談判不整立に終れり、降而明治年代八年に到り、我國は終に露國の意を受け、露領千島列島と交換する事となり、同年五月八日日本島の所有權を放棄せり、後三十年、今日我軍一舉一撃の下之を占領する事となれり。

二 位置、境域

樺太島は、其形飛魚の如く、又鰐の泳ぐに似たる、一長大なる島にして、亞細亞洲の東北部日本帝國の北に位し、東はオコツク海を距て、露領カムチヤカ半島に境し、南は宗谷海峡を距て、日本北州と境し、西北は間宮海峡(韃靼海峡)を距て、露領西比利亞沿海州と境す。

三 面積、區劃

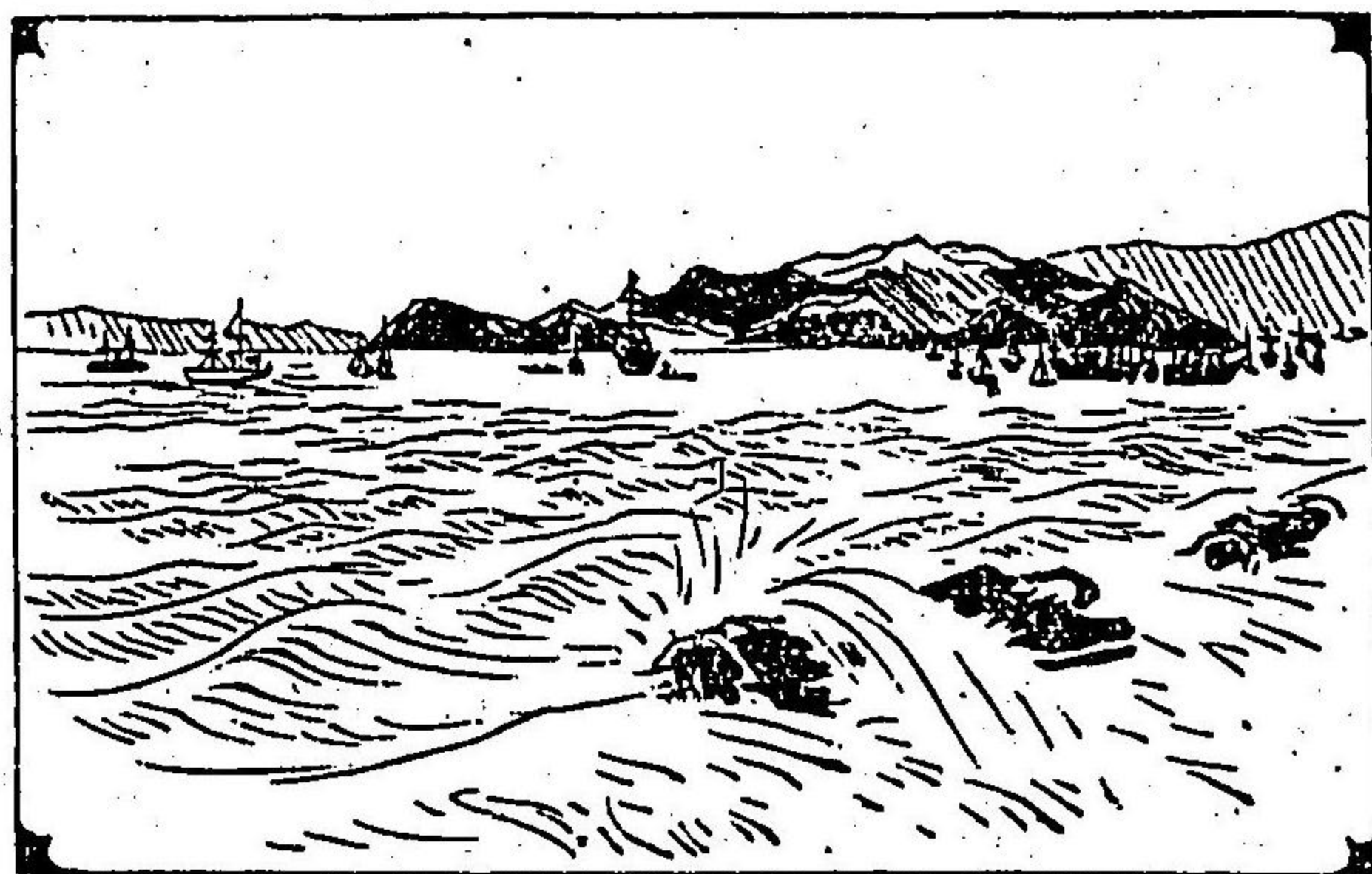
樺太島は、南北に長く凡二二五里一三町餘、東西に狭く凡六里一五町餘乃至二四里十六町餘に到り、其總面積凡千九百二十餘方里ありて、略々我北州と相比敵す、別れてコルサコフスキー郡ツルイモフスキー郡及アレキサンドロフスキー郡の三郡となり、自然の地形によりて境界せらる。

四 海岸

本島の海岸は南部の小屈曲の外皆大抵斷崖にして、鋸齒狀を呈し、單調にして一直線をなせり。

南方蟹の爪の如き形して斗出する二大半島は、ノトロ半島シレットコ半島にして、其岬角を近藤岬(ノトロ岬)重藏岬(アニワ岬)と稱し、此兩岬の間東伏見灣(アニワ)

東 伏 見 灣



灣なり東西凡二十餘里、南北凡十八餘里、水深く魚族棲息す、尙内に千歳灣(ロリセイ灣)モルシ灣の小灣、コルサコフスキ港ありて對馬岬(エンツマ)岬あり、クラシーエチヌイ角には燈臺の設あり。

トーニシ岬は、シレトコ半島の北方に斗出し、西北部にモルトウイヌコ灣あり、之より北方殆んど一直線にして只ナイフチ港、ガルキノウラツスコ岬あるのみ、七郎灣(子ルベニエ)灣は、テルベニエ半島及片岡岬(テルベニエ岬)によりて圍まれ、東西凡二十五餘里、南北凡拾里餘、灣内尙シヤモツフ灣あり、海豹島(ルベニエ)島の附近、鮭、鱒、鯨等を産す。テルベニエ半島の東岸、ニーズリニヤ、フラロト等の小灣横はり、是れよりナベリスキー灣に到る間は殆んど一直線にして、一種の鋸

齒状を呈す、ナベリスキー灣はヌイスキー灣と共に、前面數島横はり風波を防ぎ、船舶の碇繋に便なりと雖も、海底の浅きは遺憾とする所なり。エリザウエータ半島は、北方に斗出し北端エリザウエータ岬ありて、本島最北の地なり、西南マリヤ岬は共にクエゲタ灣を抱く。

樺太海灣は、西北に向て開き、南北凡十餘里、東西凡七八里あり、コロツナエツ岬の南、西海岸はアレキサンドロフスキーに到る間、只フイケ灣、ウヤーフト灣、ハルタ岬あるのみにして、アレキサンドロフスキ港は良港ならざれど、又船舶の碇繋場と見るべく、對岸カストリ灣と定期航海あり、之れより以南海岸總て岩峭鋸齒状を呈せり、海馬島(モ子ロン)島の附近漁業盛なり、本島と日本州の間を宗谷海峡と云ひ、沿海州との間、宮海峽(韃靼海峽)と稱す、尙東海岸中央近くアスランベコア海峽ありてナベリスキー灣と相通せり、本島の沿海總て霧深く一年の六ヶ月は、常に濃霧もて蔽はれ航海甚危険なりとす。

五 地 勢

本島の山脈は、北より南に中央を貫通し、尙小脈之れと平行して南に走り山間

所々平野あり。

其主脈を樺太山脈と稱し、少しく西に偏す、クカセイ山脈、クヤマチ子ル山脈は谷を距て、其東に連互し、尙西にセクシヨンスキー山脈あり、之等は共に海岸に沿ひ、南行クラ山脈、ススキ山脈となり、以て日本北州に連る。

本島に於ける有名なる高山、數多之れありと雖も、其内尤も高きは、北にエンガイスパール山、中央にモロ子山、モンゼス山、チユラ山あり、南にスパンベルク山あり、何れも五六千尺内外にして、山頂常に雪を頂けり。

六 河 湖

本島は、地形南北に長く東西に狭し、概ね脊骨山脈(稍西海岸に偏倚す)を分水界となすを以て、大陸の如く長流大河なく、又土地の傾斜急なるが故に運輸に便利なる緩流なく、且つ年中殆んど氷結し雪融の際洪水を生ずることあり、又本島の川流小屈曲をなせり、是れ蓋し流水の結果にして、日本北州の河流に類似する點少なからずといふ。

北部にカケルオ、小ツイミ河あり、共にクカセイ山脈に發源し、一ツは北に、他は

南に向て終に海に入る。ツイミ川は、中央クヤマチ子ル山脈の西側に發し、數多の支流を合せ、北流又イスギー灣に入る、流程凡三十八里餘、沿岸數里に渉る平野あり、ボルナイ河は、本島第一の長流にして、中央セイヨンスキー山脈の東側に發し、ナサト河等大小支流を合せ、南向七郎灣に入る、流程凡四十五里餘ありて、其周圍河の状態能く我國北上川に類似せり、スヌヤ川は南方の一小河にして、其沿岸土地低く、農耕に適せり、其他クウトガ河、プロサイ川等の小河あり。

本島湖沼其數多くありと雖も、多くは海岸近く海水と連絡し、所謂潟と稱すべし者なり、南にフリセ湖、中央にライチスカ湖、タライナ湖あり、北にバイカル湖等屈指の湖沼なりとす。

七 政 治

露國は、從來本島を自由殖民地となせしも、一八八六年以來此政策を捨て、流刑殖民地となし、露國軍政廳をアレキサンドルスキに設置せり、我國之を占領するや、直に軍政廳を設け、臺灣と同じく軍政を以て統轄せんとし、其内に民政廳をおき、民政課、水産課及會計課の三課を分掌し、尙民政署、附公區の設置ありて、全島

附録 樺太島略誌

を統一管轄することとなり本署をコルサコフにおけり。

八 氣 候

本島は凡北緯四十六度より北緯五十五度の間にあれば、氣候寒冷なること勿論なり、されど、其實際に到りては世人の想像するが如く強からず、先づ我國北州と大差なかるべし、尙細見すれば、西海岸は暖く東海岸は寒き感あり、是れ蓋し潮流の干係に基く者にして、東は寒帯潮流あり、加之北極地方より來る風を正面に受け、北極風を主體山脈に防遏し、且つ我對馬暖流の幾分を受くるを以て溫暖なり、今樺太島二三地方の溫度を示せば、

地名	東海岸	夏季	冬季
アスランベコフ海峡附近		七五	〇、二五
エリザウエータ岬	西海岸	六五	〇、四〇
アラワ灣西海岸		八五	〇、十

ノトロ
バイカル湖附近

九〇
七〇
〇、三八
〇、三〇

右により、本島の氣候を推測すべく、乃ち北は南より東は西より氣候寒冷なりとす、尙本島降霧甚し今過去二十年間平均を取ればアレキサンドルスキー郡内に於て一ヶ年二百七十日ワルモスキー郡内にて百二十八日は降霧なりと又以て其一班を知るべし。

樺太囚人



九 住 民

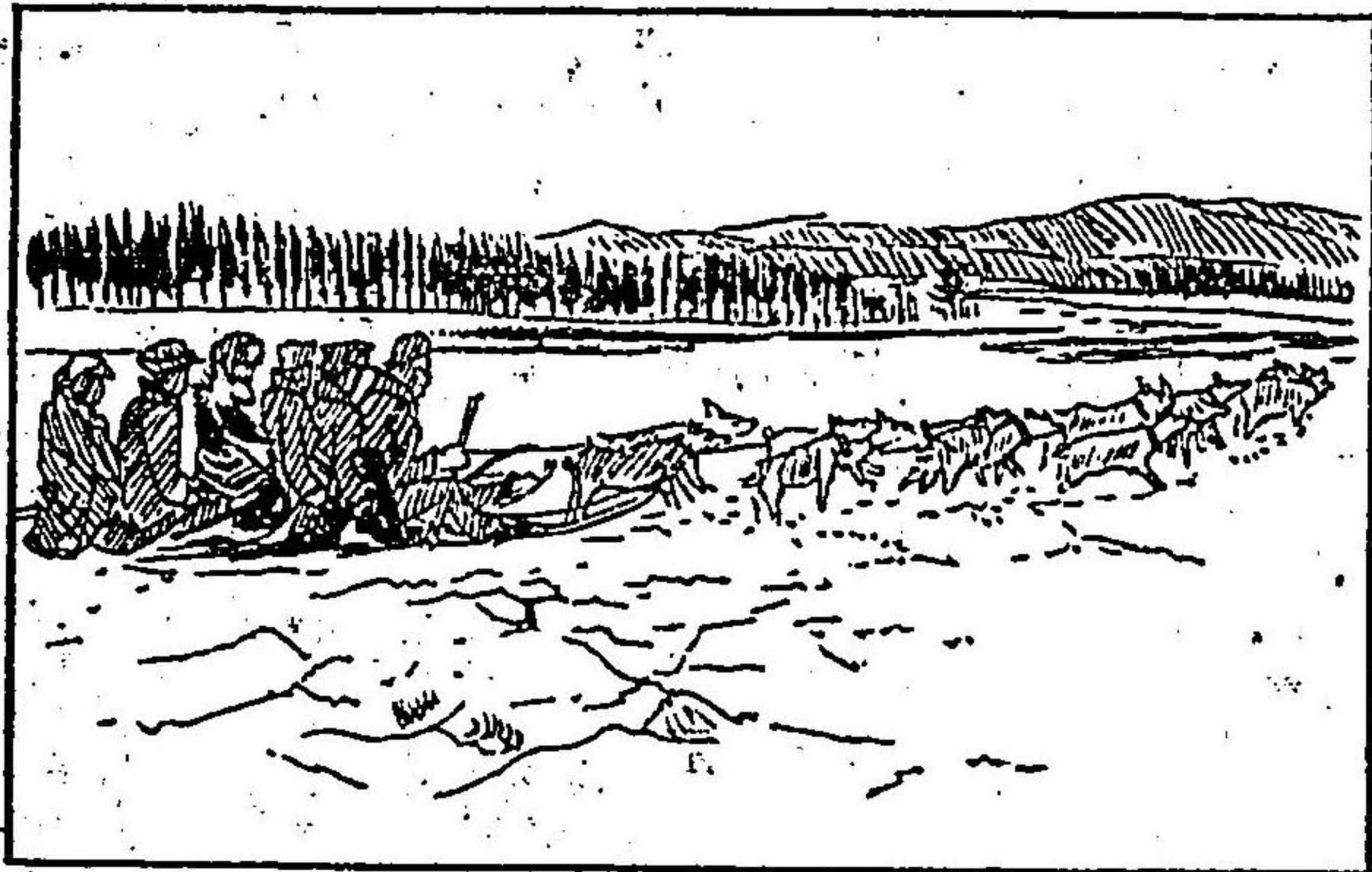
本島住民は、約四萬にして其大分は毒蛇の如き野獸に等しき重罪犯者及守備軍人にして、三萬内外あり、實際事業に従事せるもの七八千人あり、内七割は、漁業者、一割五分は、農業者、六分商業家にして、其他雜業に従ふものとす。尙此等人民の外、島民即ち土民あり、調査不完備なれば其數知るべからず、アイ

又ギリヤーク及オロツコの三種族に分れ、何等の権利もなく、只本島に住居するといふのみにすぎざるなり、ギリヤーク族は島の北に、オロツコは中央に、アイヌは南部に住居するもの、如し、土民の家屋は、多く海岸近く建築せられ、夏は低き粗末なる家に住ふと雖も、冬は大抵穴居なりとす、衣服は北海道アイヌ人と同じく、雪中にて、鮭、鱒等の皮を干して造りたる靴を用ひ、同じ皮を合せたる外套を纏ふ、共に丈夫にして且充分防寒の用具となれり、食物は大抵生魚、乾魚を常食とし、芋類を喰ふ、宗教と稱すべきものなければど、熊祭をなす風あり、又ギリヤーク、オロツコ族はシベリア及滿州の土人の多くが信仰せるシャーマン教を信仰せるもの、如く、アイヌ人は多神教にして、水、火、日、月等を神として崇拜せり、彼等のなすべき職は、多く漁業にして、其他狩獵をなす、男子は外にありて労働し、女子は内にありて遊佚に耽け居れり。

一〇 交通

本島の交通機關は、甚だ不完全にして、道路と見るべきは、コルサコフスキーよりルイコフスキーを経て、アレキサンドロフスキーに到るべき大道なり、斯は比

樺太犬橋の實景



較的平坦且廣くして、其他は不完全にして到底婦女子の旅行は出来がたき有様なり、冬季は積雪數尺に、土地一般凍結するを以て交通全く杜絶する有様なれど

尙數十頭に曳かせる犬橋ありて、交通機關とす、一日凡六七里走るといふ。

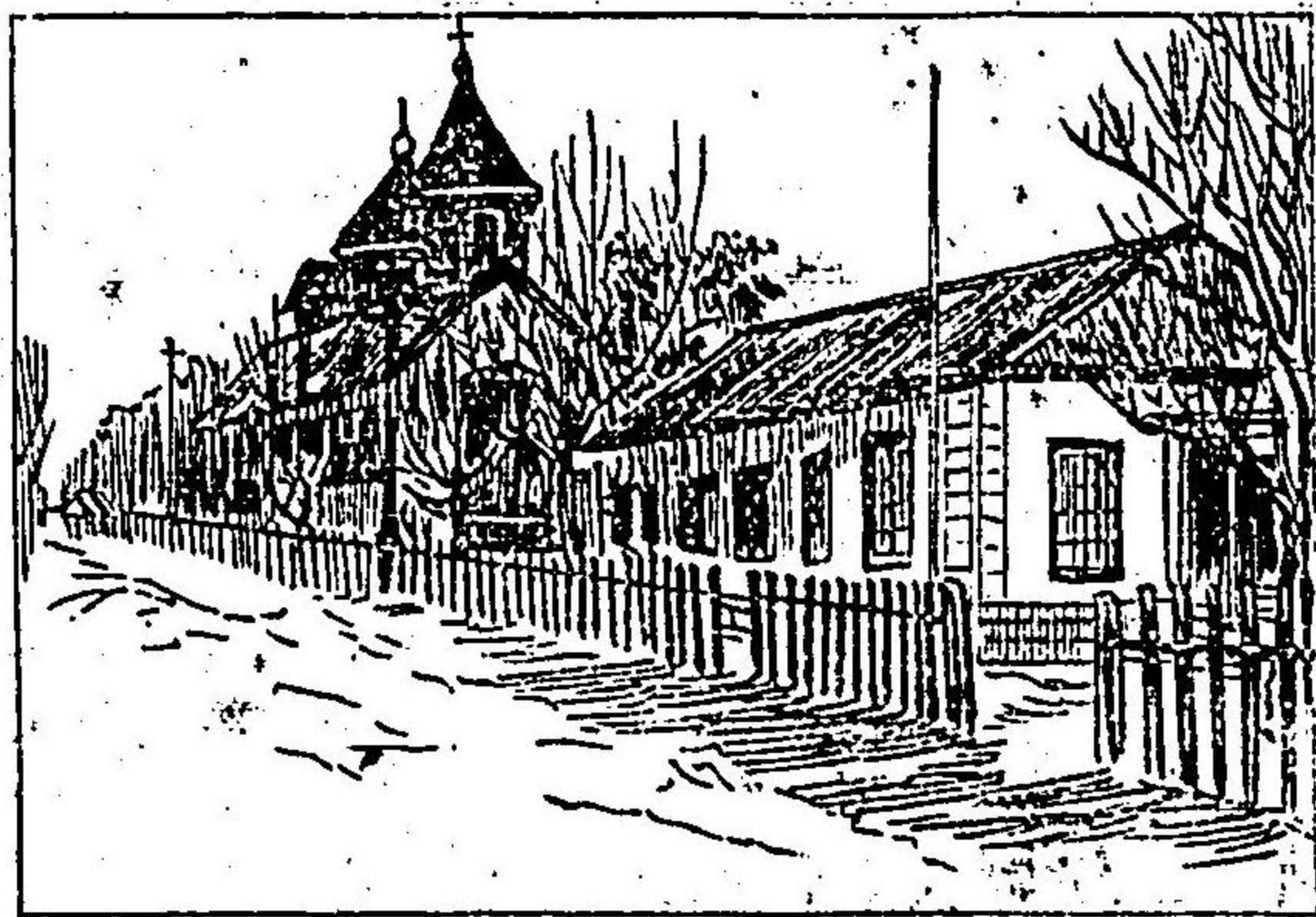
海運はアレキサンドロフスキーを中心に、コルサコフを中堅とし、諸港と定期航海ありされど、冬季海上全く氷結するを以て一年の五月間は航海舟運の便閉止せらる。電信は大道に沿ふて之れあり、又コルサコフより、我北州北見に到る者、コルサコフよりアレキサンドロフスキーに、及對岸デカストリアに到る海底電信あり、又島内樞要の地には電話の設けあり。

一一 都會

附録 大島略誌

本島都會と稱すべきもの三つありアレキサンドルスキー州のアレキサンドルスキーツイモフ州のレイコフ及びコルサコフ州のコルサコフスキー等はれなり。

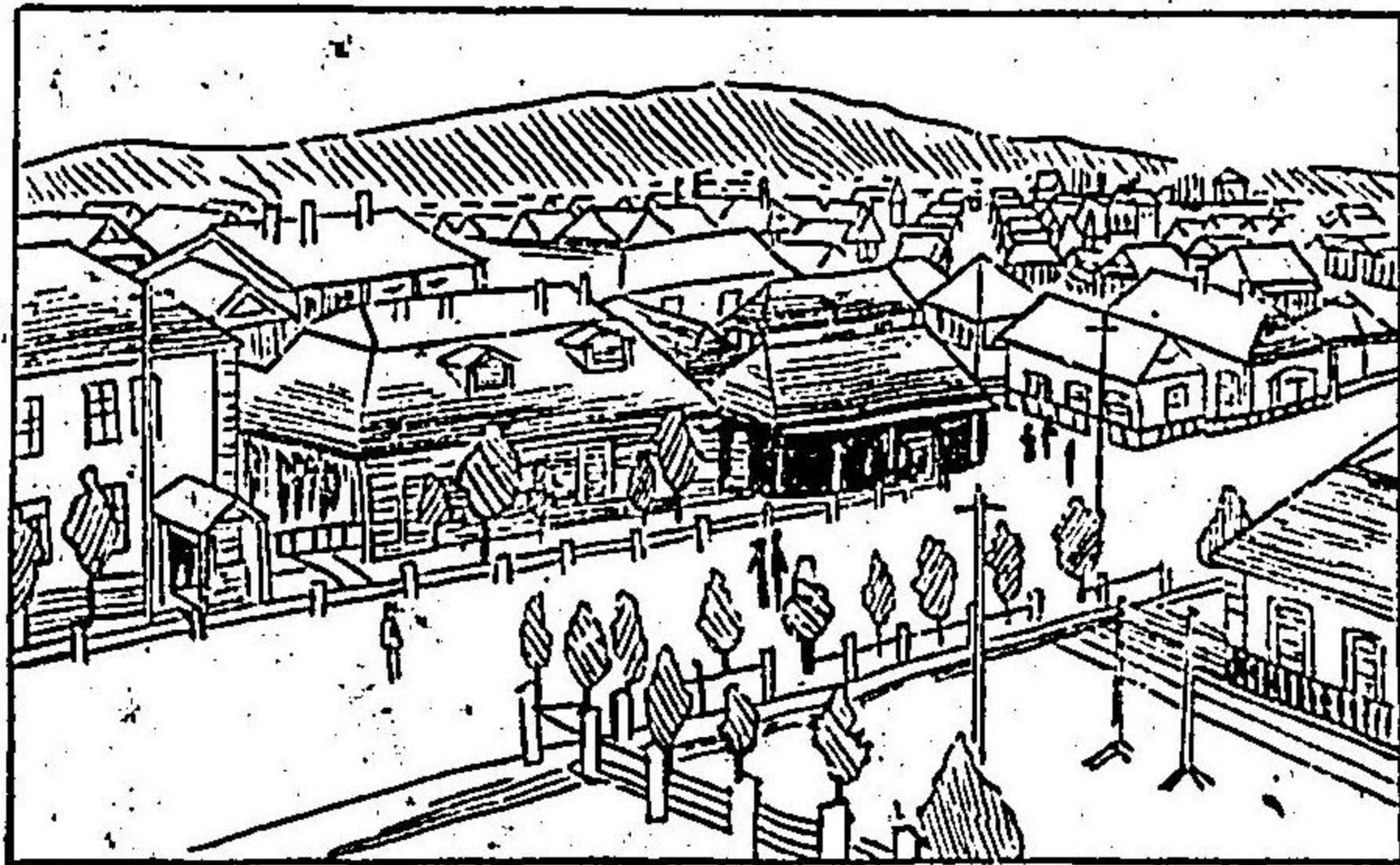
廳州 フコサルコ



營衛戍司令部陸軍病院監獄署同病院郵便電信局消防隊博物館教會堂紀念堂圖

アレキサンドルスキーは本島の西海岸アレキサンドルスキー州の西南大アレキサンドルフスキー川の河口に位しアギキサンドロスキーツエー港あり共に輕便鐵道に依て往來輸送す此市は本島の首府又州都にして一八八一年に成立し露國軍知事此所に居り以て全島を統轄せり人口凡一萬人を有す附近の地廣濶なる平地にして市街整然家屋櫛を並べ多くは不規則なる露國風の木造也主なる建築物は知事官廳を初め州廳警察署兵

街本一キスルドンナキレア



第三章 大島地理

書館氣象臺電話交換局學校販賣所工作製造場等あり今は我國民政署廳を此所に設置せり港内には大丁字形の大棧橋架設せられ長さ百三十間幅十間餘附近には倉庫休憩所事務所等あり又埠頭の尖端五十馬力の起重機備へられ貨物の揚卸をなせり港内は水深きにあらざれど本島の中央に位し民政廳あると及び對岸デカストリ一灣ある爲に船舶常に碇泊す然れども港内の廣き爲に若し西北風吹き起る時は鏡面の灣内も忽ち激浪怒濤と化し危險甚しく到底船舶を碇繋し難し故に從來露政府萬金を投じ防波堤を築造せしも此怒濤の結果整立すべからず今は事業中止せり近傍ジョンクイア岬には燈臺の設あり此市の北方海岸アルコワは我軍上陸地にして又同市の附近には日露古戰場あり。

コルサコフは本郡の都にして、本島の南部近藤岬重藏岬に挟まる東伏見灣内にあり、港内水深く平均九呎大船碇泊に便なり、此地今日重要な地にある所以は、氣候比較的温暖なること、港灣として比較的價值あること、其位置の日本に近く本島の生産重要品の集散地たる、及港の背後側面にススヤ川の豊饒なる流域ありて貨物供給の利便ある等に基因せるものなり、市街は港の北東部にありて丘陵所々に起伏しあれば、市形頗る不規則なりとす、人口凡五千人を有し、主なる建物は州廳、寺院、兵營、陸軍病院、郵便電信局、監獄署、同病院、官舎等あり、夏季漁業期に到れば、船舶常に輻輳し、本邦漁業者の出入ありて頗る殷賑を極む。

港内は市長ウノヤコンの設計によるものにして、燈臺あり、其下に檢疫所一條棧橋架せられ、貨物揚卸に便なりとす、只港内の規模狹隘なること、西北風の吹き起る時は、波濤船側を打ち頗る危険なること甚だ遺憾なり、故に此二者にして他日設計經營せらるゝ曉には、本島の首都良港たるべきこと何人も争はざる所とす。

市の近傍楠溪は、明治八年以前に於ける本邦行政廳所在地にして、尙其跡歴々

として見るべく、目下此所に日本領事館、日本商店、露國官有倉庫等あり、然れども本市は、今日に於て日露戦争の結果大半灰燼に歸し甚だ寂寞を極む、又我軍上陸地として名高く、近傍古戰場多く、中にタアリ子エの森林戦は尤も有名なり。

ルイコルフは、ツルイモフスキー郡の都にして、アレキサンドロフスキーの東約十二里、ツイミ川の右岸に位し、全市の幅員凡一里半、人口約三千人あり、此所は一八七八年露國監獄看守長ルイコフの創設にかゝるを以て、此名稱を附與せりと、市街整然家屋相連櫛し、州廳を初め、官舎、兵營、陸軍病院、監獄署、同病院、郵便電信局等あり、アレキサンドロフスキーとの間には馬車の往來ありて、以て貨物を運送せり、四邊平地にして、土地肥え、遠く道開け、極めて住み好き土地なり、又ワイマ上流に沿ひ森林繁殖し、緑草茂れる原野を兩側に控ゆる所、眞に油繪の如く、近傍天然の勝景多しといふ。

一 二 産 業

樺太島の産業は、其地北方に位し、氣候寒冷にして霧の多き、人口稀薄なる結果は、未だ盛ならず、従つて産物多からず、牧畜業、農業等に到りては殆んど見るべき

ものなく、只林業水産業鑛業等にして、中にも産額の尤も多きは水産業にして林業鑛業之れに次ぎ共に本島の三大富源と稱せらる。

林業 本島の面積凡四分の三は森林なりとす而して本島の植物帯は、第一海岸帯、第二下層潤葉樹帯、第三針葉樹帯、第四上層潤葉樹帯、第五偃松帯、及第六アリビイ帯の六帯に分たる、本島の北部は森林皆無と稱すべく、中央部と南部とは多大の森林繁殖せり、其主なる植物樹木は、落葉樹、楡、白楊、（下）柳、ハコ柳の二種あり、白樺、黄樺、水楊、赤楊、楓等なり。

今其區域を分つれば第一帯の如きは多く植物を見出す能はず、只海岸草類繁茂するのみ、第二帯は樺、白楊、赤楊等の如き潤葉樹等繁茂し、本島有望なる森林帯なりとす。

樺太の山の林



第三帯は、針葉樹多く、頗る善良なる森林にして、樅、唐松あり、又傾斜低地には、黒覆盆子、小鳩等の小灌木叢生す、第四帯は高地凡そ七百尺以上の所に樺木あり、又楊柳を混す、第五は、偃松一面地を蔽ひ、第六帯は即ち高山の草類にして、本島最高の地植物なりとす。

樺太の森林

如斯、本島には森林廣く繁茂し、良材を産すると雖も、寒風の直接間接吹く所は、漸次不毛の沼湿地の状態に陥りつゝあり、尙ほ從來露國は森林行政機關を不完全にせし爲めに、此等價值ある森林良材も年々荒廢に傾く有様となれり、彼の人民一般が燃料とせる薪木は、勿論官廳の許可を得て枯木を採集するものなれど、其内實皆生木を採伐し、且つ運搬し易き方面地方より採伐し、其跡をば片付けざる爲め、自然荒廢に傾き、又山焼け屢々あり、されば此等無限の富源物も年と共に腐朽に陥るの有様は惜しむべき次第なり、然れども尙ほ内部に到れば、斧斤を加へざる森林蒼鬱として繁茂し、晝尙暗夜たる状態たるを以て、之を今後整理し、經營する上は、本島の森林業は頗る有望にして益々有益なる者なり。

鑛業 本島の鑛物は豊富なるか否か、現今に於て其調査の不完備なる爲め、克く知る能はずと雖も、石炭、砂金、石油等の鑛物包蔵せらるゝは確實なりとす。彼の嘉永年間露國が一度び石炭層を發見し、以來極力本島を占領し、太平洋に於ける石炭の貯蓄所採掘所として經營せし事を以て明かなり、故に此等の事實よりして本島が多量の石炭を初め、石油、砂金等を包める事は信賴すべきなり。

本島の鑛物中、最も多量なるは石炭にして、炭鑛は多く海岸近傍運搬し易き所にあり、現今其數二十ヶ所ありと雖も、有望なるは四炭鑛なり、年額凡二萬五千噸あり、其質は本邦九州炭と異ならず、普通炭として多く造船所等に使用せらる、石油は多く海岸地方に發見せられ、現今は其採集機關の不完備なる爲め、其量額知る能はずと雖も、地質上より云へば、石炭と共に頗る有望なりとす、砂金はススマ川リウタカ河等に發見せられたり、其他銅、鐵、鉛等の鑛脈鑛層の地是れありと雖も、今日迄未だ其開坑採集の緒に就かず、之等は共に將來完全なる機關整頓せる時に於て、多量の採掘あるべきは必然的の事なりとす。

水産業

世界の三大漁場は、一ツに諾威の海岸、二北米カナダの東北部、三

我國北州の地樺太島近海にして、就中尤も有望豊富なる地は、第三樺太島近海にあり。

此近海に於て、年々季節を定め、鯨、鯨鯨等群來し、蒼海爲めに純白に、鏡面爲めに海波を生ずと、中に鯨は世界の諸國を凌駕すといふ。

此等魚類の外、鯨鯨等あり、鯨は専ら西海岸に多く、鯨は南部七郎灣、ウルベニヤ灣、東伏見灣、アニワ灣に多く、鯨はオコツク海附近なり、又昆布海苔、和布の如き海草は海岸近く一面水上に露出し、茫々たる一大原野たるが如く、尙鯨、臘虎、臘肭川、獺、海豚、海馬、海鼠、蠟、帆立貝等棲息すると雖も、從來單に鯨、鯨鯨の方面にのみ極力從事せしかば、又顧る者なかりしが如し、只鯨は我國民によりて漁獵せられ、其産額三十六年度に於て七千三百餘圓あり、多く東伏見灣、又西海岸にて之を獵す。

露國は、一九〇三明治三十六年、漁場區域に依り、鯨、鯨鯨の漁業を許可する事となり、其區域は東海岸に九十四、東伏見灣、アニワ灣、六十二、西海岸八十八、北東海岸八、合計二百五十二と定めたり、又三十六年日露兩國人が漁獲したる數量を見んに。

附録 樺太島略誌

	日本人	露國人
鮭 粕	八二五、八一二 ⁷ / ₁₀	九〇三、一六三 ⁷ / ₁₀
鱈 油	一五四、六九六	九三、五六九
魚 油	三四、一七六	一〇、九六二
鮭 脂	二三、四八〇	一九、〇九七
鯨 脂	一二、九四	ナシ
身 欠 鯨	一一、七五	四七
鱈 子	一〇、九二	二七五
筋 子	三四二	一二八
數 の 子	二八六	二一
昆 布	二一六	五八、八〇〇
鹽 漬 鯨		一〇九
計	一、〇四二、五六七	一、〇八六、一六一
石數にすれば	一一三、六三九 ⁸ / ₁₀ 〇三	一一八、四九一 ⁵ / ₁₀ 五四〇

蓋し一フートは日本の四貫三百六十目に當る
 尙過去十二年間に於ける、同島漁業の狀態漁獲高を擧ぐれば、

年 次	日本人	露國人	計
廿五年	二六、二五二 ⁷ / ₁₀	一一、四九七 ⁷ / ₁₀	三七、七五〇 ⁷ / ₁₀
廿六年	二八、七〇七	一一、〇〇〇	三九、七〇七
廿七年	三一、八八四		三一、八八四
廿八年	三三、九九二		三三、九九二
廿九年	四一、六〇九	二二、〇五八	六三、六五七
三十年	五九、四二九	一八、四四六	七七、八七五
卅一年	五〇、一七三	二五、七七三	七五、九四七
卅二年	七七、〇六五	三六、三六七	一一三、三三二
卅三年	五七、一三七	七一、一九二	一二八、五二九
卅四年	六七、九〇八	六四、九三一	三二、八四〇
卅五年	八一、九三九	七三、二三〇	一五五、一六九

附録 樺太島略誌

卅六年	一〇九、四三四	一一七、一三三	二二六、五六八
合計	六六五、五三三	四五二、七三一	一一、七二六、四

此表は、鯨、鮭、鯉、昆布の漁獲高なるか尙其他魚油、鱈、身欠、鯨、筋子、敷の子等を加算せば其額多量なるべし。

露國は、本島漁業に對する規則を作り漁業の制限をなせしが、今回我國占領すると共に、陸軍省告示第十五號を以て樺太漁業假規則を發布し、以て同業に對する漁業制限を告示せり、同時に同省十六號を以て樺太島出入船舶及渡航者規則を發布せしが、尙此等規約心得等に就きては今後精細なる調査を得て記載すべきなり。

農業 本島面積三分の二は漁業地にして其他は不適地なり、而して漁民は四割四分の比にして、凡そ一萬五千四百六十五人となれり、年々の收穫量は一般より云へば悪しからずと雖も、島内各地の氣候の良からざる爲め將に成熟期に到り降霧のあるあり、又地味の不定、農具の不完全は大に農作物の成熟を害する基因となれり、されば一年の收穫産物の穀數は以て僅かに農民の口を養ふに

足る、依りて他は多く馬鈴薯を以て其不足を補ひ然らずんば、麥粉、鹽肉、其他の食料を仰げり、而して蔬菜は馬鈴薯の外甘藍、大根、人蔘、大蕪、青蕪、葱、頭、豆類等あり。今本島の農作區面積及穀菜の收量を擧ぐれば、

一九〇〇年調査

農地面積

行政區劃	穀區	穀區	菜區
アレキサンドロスキー區	一、〇八三	七五九	四八五
ソイモフスキー區	一、四〇八	三、一七四	二八
コルサコフスキー區	二、八一三	二、一一三	五四八
合計	五、三〇三	六、〇四六	一、〇五六

農地單位はデシヤチンにして、デシヤチンは我一町一反四畝八歩

一九〇一年の調査

行政區劃	播種	收穫
アレキサンドロスキー區	四六四六	二〇、〇〇〇
ソイモフスキー區	五九一三	三〇、九一四
コルサコフスキー區	六八八九	五九、三六六

附録 樺太島略誌

ライ麦	播種	—	—	二五二	—	一六
ライ麦	收穫	—	—	一三三六	—	一一九
裸麦	播種	一五一	—	一八六二	—	三六八五
裸麦	收穫	三二九	—	七、七九四	—	三三、三五二
大麦	播種	六一四	—	三、四九一	—	三四二
大麦	收穫	二、四二二	—	一六、二七五	—	二、九〇二
燕麥	播種	二、八五一	—	二、一五三	—	四八〇
燕麥	收穫	一三、九四二	—	一八、九五四	—	三、九五七
馬鈴薯	播種	二七、九〇一	—	一五、二一六	—	一六、九七八
馬鈴薯	收穫	五九、〇四三	—	一四三、九七六	—	一六二、〇四三

一ブウトを單位とす一ブウトは我四貫三百六十匁

以上の如く、年々收穫是ありと雖も、其實際は不成業と云ふべく、將來農具の改良耕作方法の改正あるにあらずんば、到底外國輸入を仰がざるを得ざるなり。

牧畜業 本島の牧畜業は農業に比し稍々成功せると雖も、氣候の不順は

又以て其業を障害し且つ適當の牧野牧草耕作地のなきは大に斯業發達を防遏し爲に冬季は家屋に於て飼養する有様となり、其費用甚だ多大となり、從て斯業盛大ならず今最近の調査によれば、

家畜として

牛	羊	凡	九、八七二頭	馬	凡	三、八七二頭
豚	凡	二、七八〇頭				

家禽として

鶏	凡	二、三、六、四、六羽	家鴨	凡	二、五、九、三羽	
鶩	鳥	凡	一、二、四、六羽	七面鳥	凡	一、一、九羽

要するに本島の産業は先づ水産業林業に指を屈し、次いで鑛業農業及牧畜業に及ぼすべし、而して是等は總て我當局者にして専心改良を計畫するに於ては正に是れ我地方に於ける一大富源寶庫と稱すべきなり。

一三 樺太新地名

我國樺太島占領すると共に一部の地名を改稱せり。

附録樺太島略誌

新名	舊名	新名	舊名
東伏見灣	アニワ灣	千歳灣	フロセイ灣
七郎灣	テルヘニエ灣	對馬岬	アニツマ岬
近藤岬	ノトロ岬	重藏岬	アニワ岬
片岡岬	テルヘニエ岬	海馬島	トドシマモ子ロン
海豹島	ロベン	海豹岩	ミルンケ
二丈岩	オバソロン	間宮海峽	韃靼海峽

附録樺太島略誌終

跋

日本地理詳説愈々世に出でんとす。余聊か此書の刊行に携はれるが故、恰も自己の物の如き感あり。昨夏大久保君初めて余が寓を訪ひ、其多年研鑽を積まれし大部の原稿を示さる、余は其真面目なる研究に敬服せり。爾來交情日に加はり、次で其出版に奔走せし事もありしが、偶々大戰僅に止み、講和條約の不滿天下に滿つるに際せしかば、事の進行甚だ遅々たりき。是より先き中村君とも亦た粗ぼ同様の關係によりて交を結び、次第に親しむ内君も博文館の依頼によりて一著書にかゝりつゝあるを明かさる。是に於て余は兩君の著書が其期する所甚だ相近きを知り、頗る心苦しき位置に立てり。現に此同種類の書が殆んど同時期に出で、互に競争する事となるを知れる以上、傍觀するに忍びざればなり。依て思へらく若し此兩書が合同して出でんには一舉兩得にあらずやと。乃ち試に此意を兩君に洩らせり。但し單に意中を通じたるまでの事なりき。然るに兩君の明敏能く此の意を諒とし、寛量淡泊以て初見の友と忽ち妥協を遂げ、終に共同して出版の運びに至れるもの即ち本書なり。かくて愈々専心力を注ぐに至るや、間もなく中村君の嚴君宿痾に瘥れき。是より先き大久保君も其嚴君の看病に高知に歸省中、此の悲

報に接して一先づ京に上り暫らく進行に従ひしに、間もなく再び郷里に歸らざるを得ざるに至り、次で其嚴君も亦た不歸の客となり、遂に足を郷里に止むるの止むを得ざるに至りき。斯かる間に出版の期は刻々迫まり、遂く高知まで校正を送るの暇なく、中村君獨り之に任せしに、不幸中村君も亦た遂に病痾に筆を奪はれ、今尙ほ茗溪橋畔の病院に呻吟す。眞に氣の毒に堪えざる所なり。斯くも重疊せる是等の悲痛が此書の進行を阻碍して漸やく茲に至れるを知る余豈一言なかるべけんや。兩君共に此書を其父君の存命中に捧ぐる能はざりしに想ひ至るとき其感慨や果して幾何ぞや。あはれ此書の愛讀者諸君。願はくは以上の實情を察し、夫れが爲めに免かる可からざりし瑕瑾に對して深く咎め給ふなからんとを。

日本地理の智識に就ては近來大小の著書頗る備はる。去れば社會は是等の智識の缺乏について殆んど憂ふる所なくして、唯だ夫等の智識を如何にして收得するかに苦しむものゝ如し。是に於てか今社會の渴望する所は内容の多少よりは寧ろ其の排列の整頓せるものを望むや切なり。此の時に當つて今此の一大好著を迎ふ、その世を裨益すると多大なるを信す。

明治卅九年六月

牧口常三郎

明治三十九年六月十七日印刷

明治三十九年六月二日發行

本邦地理詳説奥附

定價壹圓八拾錢



著者

中村士徳
大久保千濤

發行者

大橋新太郎

印刷者

山田英二

印刷所

博文館印刷所

東京市日本橋區本町三丁目八番地
東京市小石川區久堅町百〇八番地
東京市小石川區久堅町百〇八番地

發兌元

東京日本橋區本町三丁目

博文館

伯爵東久世通禧君題辭
土居香國君序文
上島長久君跋文

松永聽劍君記述

樺太及勘察加

全一冊洋裝大判紙數三百六十頁
樺太及勘察加地圖及寫真八頁入
正價 金五拾錢 郵稅八錢

本書は之を上下二編に分つ上編には樺太の沿革、歴史、地理、産業に關する諸般の事項を網羅し懇篤詳細に記述せるを以て該地に對する唯一の寶典たること論を待たず加之最珍奇の寫真銅版數葉と風俗、家屋等の繪畫數十葉を挿入せり、且つ有益なる統計表を添へ實地踏査せし記事を骨子とし尙魯國最近の出版物を翻譯し且つ有益なる統計表を添へ具體的に之を記述せり日露戰爭唯一絶對の紀念物たる我樺太の真相を知らんとするの人士は必ず一本を備ふるの要あり

館文博 元兌發

日本山嶽誌

全一冊洋布上綴大判美本
紙數壹千三百貳拾餘頁
正價金貳圓 小包料貳拾錢

東京日々新聞評 編者高頭氏は北越三島郡の人性山岳の遊を喜み世俗と其趣を同うせず而て其天下を周遊して親く大山の山岳に遊覽し又地獄地文の幾千卷を讀破して本邦の山岳に就き安大該博なる見聞を得するや復た山岳誌編述の壮志を懷き苦心經營十星霜遂に撰記の著述を大成せり、收る處全國の山岳千餘の多きに及む其位置、形状、高度、山麓、山頂、其附近の沿革を詳叙するの傍ら其山々に關連して作成せられたる諸歌俳諧文章等を網羅して殆ど剩す處無し加ふるに諸名山の形状、遠望等圖畫若し寫真を以て細説せられたる諸歌俳諧を添附ならしむるに多大の功力あるを疑はず、石黒況翁、三島中洲諸氏巻頭に序し依田百川之が跋を爲せり

館文博 元兌發

博文館編輯局主幹 坪谷水哉君著

日本漫遊案内

兩卷共銅版刷市街精測圖二十餘葉、寫真銅版八十餘面、及全國各半部詳密着色大地圖添附

全一冊洋布上製
中判頗美本
本文紙數千三百七拾餘頁
定價一冊 金壹圓
郵稅一冊 貳錢 宛

上卷 東海、東山、北陸、北海の各道と樺太
下卷 近畿、中國、四國、九州、琉球の各道と韓國

案内記なくして旅行するは、燈無くして暗中を行くが如く、また誤れる案内記を携へて旅行するは破損せる磁石を以て大洋を航行するが如し。何れも極めて危険なり。本書著者夙に旅行癖あり、常に筆と寫真器とを携へて普く各地に漫遊して、凡そ全國の名山、大川、港灣、湖海、神社佛閣、名所舊蹟、具さに自ら之を探りて、其順路と車馬の利用は勿論、旅館、酒樓、休憩所の用意まで最も確かなる案内記を編し前年之を公にして大に好評を博して以來、尙ほ世運の進歩と交通機關の改良とに伴ひ、次第に其の狀況を異にするを注意し、斷へず巡遊して實地を檢し、版を改むる毎に訂正を加へ、今や第二版成る。而して
上卷には「樺太」の新版圖、下卷には「韓國」の保護國に遊べる最新の案内記を添へ、北海道、奥羽、中央の各鐵道が近來開通したる沿道の案内記も、精密に實踐して之を訂正し、附録の全國地圖は、益々精細を加へたり。旅客幸に此書を行李の中に收めば暗夜に燈無く、航海に磁石の損したる危険を免かるべし、旅客ならざるも、一室内に緝讀して、坐がら名所を知るの快あるべし。

館文博 町本京東 元兌發

八木英二郎君編

學生必携 修學行旅案内

關東地方

三六版上製紙數七百頁 正價四拾五錢 郵稅八錢

科學實習の爲め學生が各地に旅行するは所謂細水線ならずして平素教場に學修する課程を實地に試験し又た採集探求するを以て其研究上に於て少からざる實益を得べし本書は其實益に資する爲め流暢明快の筆を以て中學校の程度を逸せず考古、歴史、人類、土俗、文學、建築、地理、礦物の諸學科に關する説明を各項に記入せり

野崎左文君外四君共著

日本名勝地誌

全部十二冊洋裝中判 紙數一冊五百頁以上 每編地圖挿入

▲正價 一冊金參拾錢 六冊金壹圓七拾錢 全部十二冊參圓參拾錢 郵稅一冊六錢

第一編	畿内之部	第七編	北陸、山陰道之部
第二編	東海、東海道之部	第八編	南海道之部
第三編	東山道之部	第九編	西海道之部
第四編	東山道之部	第十編	北海道之部
第五編	東山道之部	第十一編	北海、山陰道之部
第六編	東山道之部	第十二編	北陸、山陰道之部

文學士 大町桂月君著

一簣一笠

袖珍美本 正價參拾錢 郵稅六錢

桂月先生筆に健にして又脚に健なり閑あれば則筆を絛せて飄々として天下の名山大川に遊び興到り筆を落せば筆に聲あり筆致或は優婉花の如き美名となり或は雄壯或は豪宕の如き美名なり或は流暢の佳篇となり千變萬化端視すべからず此一篇先生の紀行を集むるや川や先生の才筆に隨はれて紙表に躍動す

文學士 久保天隨君著

檜木笠

袖珍美本 正價貳拾五錢 郵稅六錢

此書久保氏の紀行文廿餘篇を編りたる文中時々詩俳を加ふ閑窓の下淨机の上眺みに一讀すれば紛々たる俗塵を隔離して相伴ふて遠く去り青山白水の間に逍遙するの感あらん

大橋乙羽君著

千山萬水 續千山萬水

全二冊洋裝袖珍頗 美本紙數二千二百頁 正價一冊五拾錢 郵稅拾錢宛

本書は屏くも九重の聖覽を賜ふの榮を得前古稀有の美本として内外の喝采を博し發賣以來既に十八版を刊行するの盛運に會す各地の名山古蹟勝景等優美なる色刷寫眞版數百景を挿入して一々懇切に詳述したれば一面完全なる旅行案内たると同時に婉麗なる大文章なり而して前編には東北地方を記し續編は西南部を專叙せり

發兌元 博文館

田山花袋君著

南船北馬 續南船北馬

正價四拾錢 郵稅六錢 正價廿五錢 郵稅六錢

隨處に感興を作り到る處に詩想を着するは花袋氏の紀行なり、殊に氏は暗勝のみに富みて殘山剩水處として至らざるなく探らざるなれば、其紀文は珍談奇話百出して或は溪村の夕或は深山の夜或は怒濤岸を噛むの邊或は山の趣味あり。

野崎左文君共著 田山花袋君共著

改訂漫遊案内

袖珍美本正價五拾錢郵稅八錢 流暢なる行文を以て詳かに日本全國各地の名勝を紹介したるものにして、其如何に世の歡迎を受けしやは發賣以來其廿五版を重ねたるを見ても知らるべし而して社會の事情は年と共に改まるを以て田山花袋君主任となり修訂大増補をなし大に紙數を増し面目を一新して江湖の需用に應ず



發兌元 東京日本橋區本町 博文館

理學士 吉田弟彦君著

訂攻 日本商業地圖

厚表紙金文字入美本
縱一尺二寸横九寸五分
正價 金壹圓
小包送料拾五錢

附錄一關係重要諸統計表四十頁

目次

- (一) 世界地貌及海流の圖……………
- (二) 世界重要物産及商路の圖……………
- (三) 日本交通圖……………
- (四) 帝國全地形圖……………
- (五) 千島及北海道北部圖……………
- (六) 北海道南部圖……………
- (七) 奥羽地方圖……………
- (八) 北陸道北部及位置七島小笠原北陸道中部圖……………
- (九) 北陸道中部圖……………
- (十) 四國及中國中部圖……………
- (十一) 九州全圖……………
- (十二) 臺灣全圖……………

商業の地圖に待つある猶航海の海圖に於る如く作戰の戰圖に於けるが如き者あり之を以て歐米諸國皆商業地圖の行はれざるなし然るに我國未だ此種の好著良圖のなきは聖代の缺點と云ふべき也、本圖は素と農商務省地質調査所に在つて久しく製圖に従事せし某氏の精圖を基礎として吉田理學士新たに之に加算せらる、運輸の交通此圖に依りて明詳、商業の形勢炳焉として掌中を見るが如し、況や最近の調査に依つて諸般重要の名數を加へ覽者をして多大の便利を與ふるのみならず、附錄の諸統計は錦上添花を添ふるの概あり、戰勝國の實業家須らく一冊を机上に備ふべき要圖なり。

著君臣國部勝 士學法

理地業商國清

全一冊 洋裝大判 正價五拾五錢 郵稅八錢 並製

本書は支那の通商貿易に關聯する一切の事項を網羅したるものにして支那に於ける列國の經營及び鑛山の所在地を始めとし輸出入商品の性質販路より通貨金融機關及度量衡交通機關の概狀を解説し殊に各商業地の狀態商業上の取引習慣及び各地支那商人の風習好尚に至るまで之を詳述し苟も支那貿易の爲めに資すべきの事項は悉く説述解明して剩す所なし而して本書の著者は大學院にありて専ら世界の通商貿易に關するものを攷究し又多年職を農商務省に奉じて日夕支那に關する通商貿易を調査したるもの、本書が支那貿易に志す者に於て如何に絶好の指導者たるかは問はずして自ら明かなり

著君彦友淵田 士學文

理地新國韓

全一冊 洋裝大判 正價五拾五錢 郵稅八錢 並製

帝國が韓國に對する態度は既に已に確定して又動すべからず。韓國が帝國の保護國附屬國にして換言すれば一種の新版圖たる者は世界も之を容認せり。韓半島は將に此より最も痛切に吾人の研鑽籌謀に入らざるべからず。然かも甚しい哉邦人の半島の事態に通ぜざるや。從來韓國に關する幾多の著述世に出たりと雖も多く實業若くは政治に偏し未だ韓國の現在を學術的に解説したる地理書の完全なるもの刊行せられず。著者多年韓國問題を検索し甚だ韓國の事情に通ず。本書は内外最も新新の資料に據りて著述せられ韓國百般の現在の事態を最も明確に餘蘊なく説明したるものにして地理書として最も完全なるものたる而已ならず韓國問題の研究せんと欲する者に向つて所謂時勢の書として最良の參考書たり。故に學術的に韓國を研究せんと欲する者及び將に韓國に經營を試みんと欲する者は必ずや此書を一讀せざるべからざるのみならず。苟も日本國民たる者道爾新米の一冊庶土の大概を知了せんと欲せば又此書を讀まざるべからず。

發兌元 東京日本橋區本町 博文館

理學士佐藤傳藏君著

日本新地理

全一冊
洋裝
三百十四頁

上製正價五拾五錢 郵稅拾錢
並製正價四拾錢 郵稅八錢

本邦の天然地理、人文地理、地方誌の三項を最新の事實に據り、確實の統計を本とし、巧妙の組織、簡潔の叙述、意到り筆隨ひ、説き盡くして餘蘊なし、彼の華僑と海運とに至つては立論奇抜にして、世に明瞭中等教育の参考書、教科書として、世に他に比類あるを見ず、本邦に生れて此邦士の何たるを知らんとするの人士は一本を購ふて新地理學の價值を詳するに怠る勿れ。

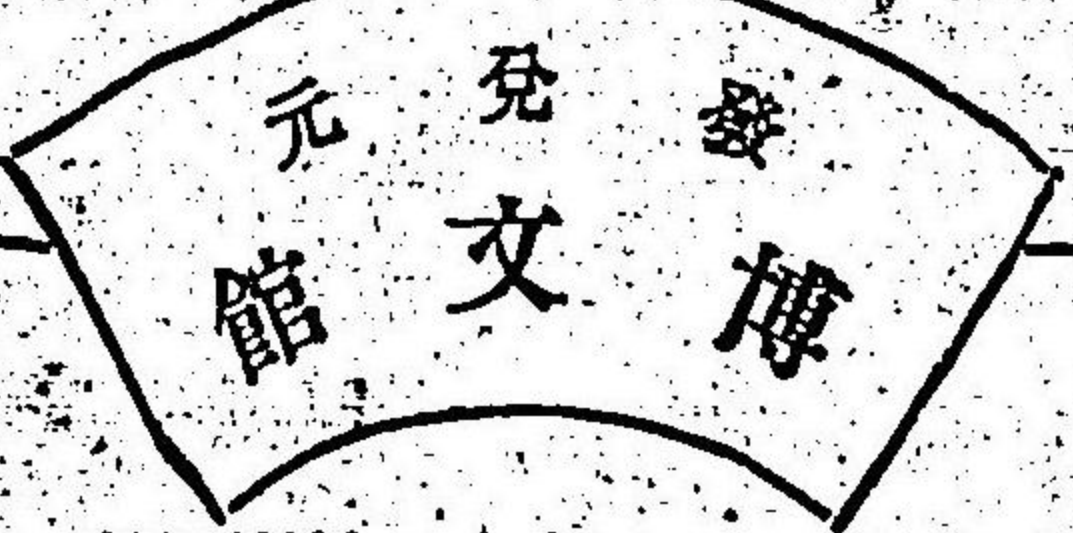
理學士佐藤傳藏君著

萬國新地理

全一冊
洋裝
三百七頁

上製正價五拾五錢 郵稅拾錢
並製正價四拾錢 郵稅八錢

嗚呼萬國新地理生れたり、何が故に生れたるか、一般人類に向て、新地理學の要領を語らんが爲めなり。最新の事實、最新の骨髄也。特色也。亞細亞、朝鮮、南洋、日本新地理の良兄弟姉妹なる此萬國新地理を見よ。



上村貞子君編
武田櫻桃君增訂

改訂新撰日本地理問答

全一冊
紙皮上綴
二百五十四頁

正價金貳拾錢 郵稅四錢

本書の初めに刊行せられたるは、實に三十五年一月にして、爾來江湖の學生諸君に愛用せられたるが如き行政區域の改正、軍艦、學校、師團、官廳の増減、人口の増殖、産業の盛衰等著しきものあり。加之今や樺太の北緯五十五度以東は、全く我が版圖に歸したるなど、此に大訂正の必要あるを認め、我が最近の地理書及び統計に照して加筆改訂し、更に樺太の一項を増補したり。

武田櫻桃四郎君著

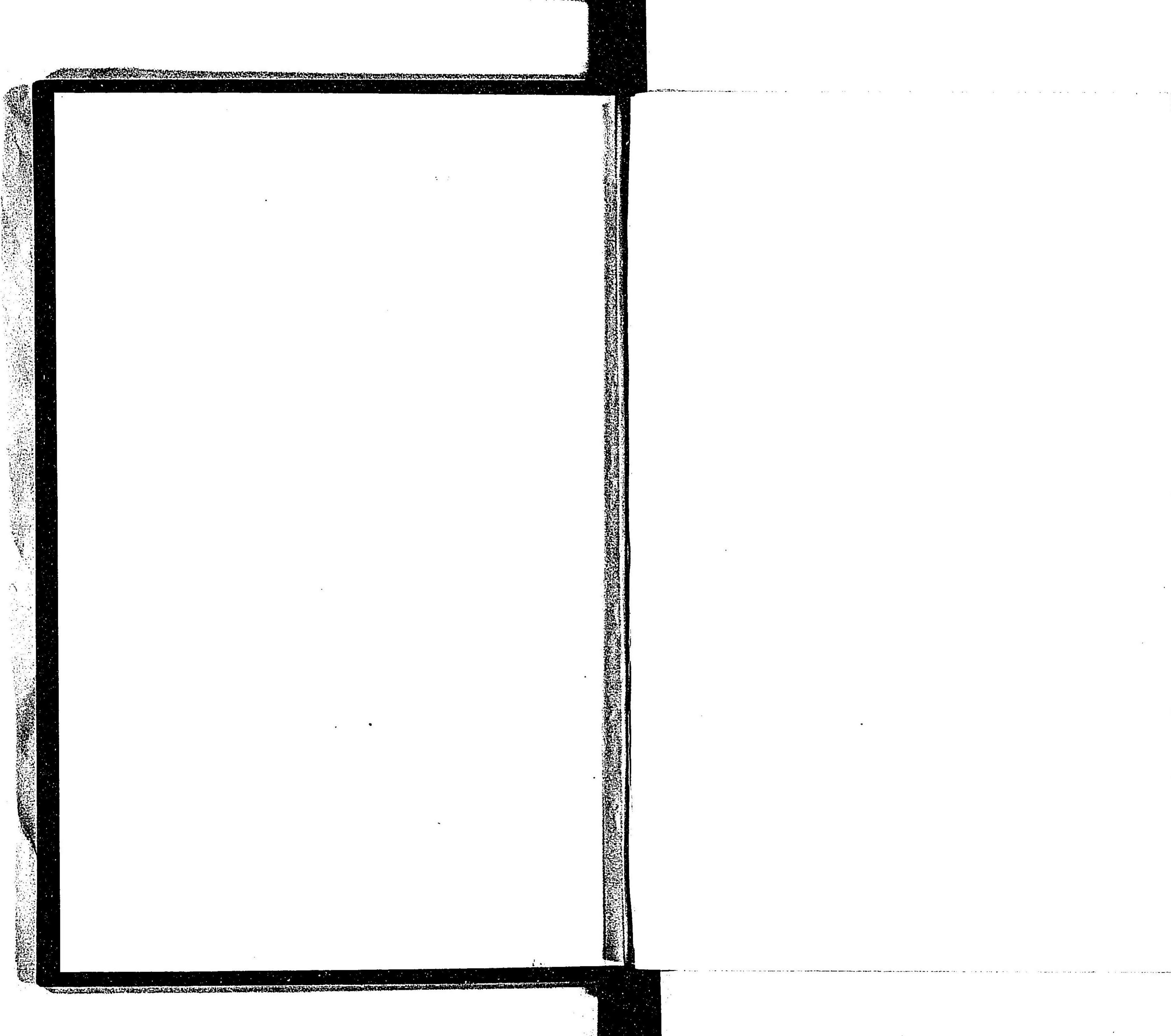
新撰世界地理問答

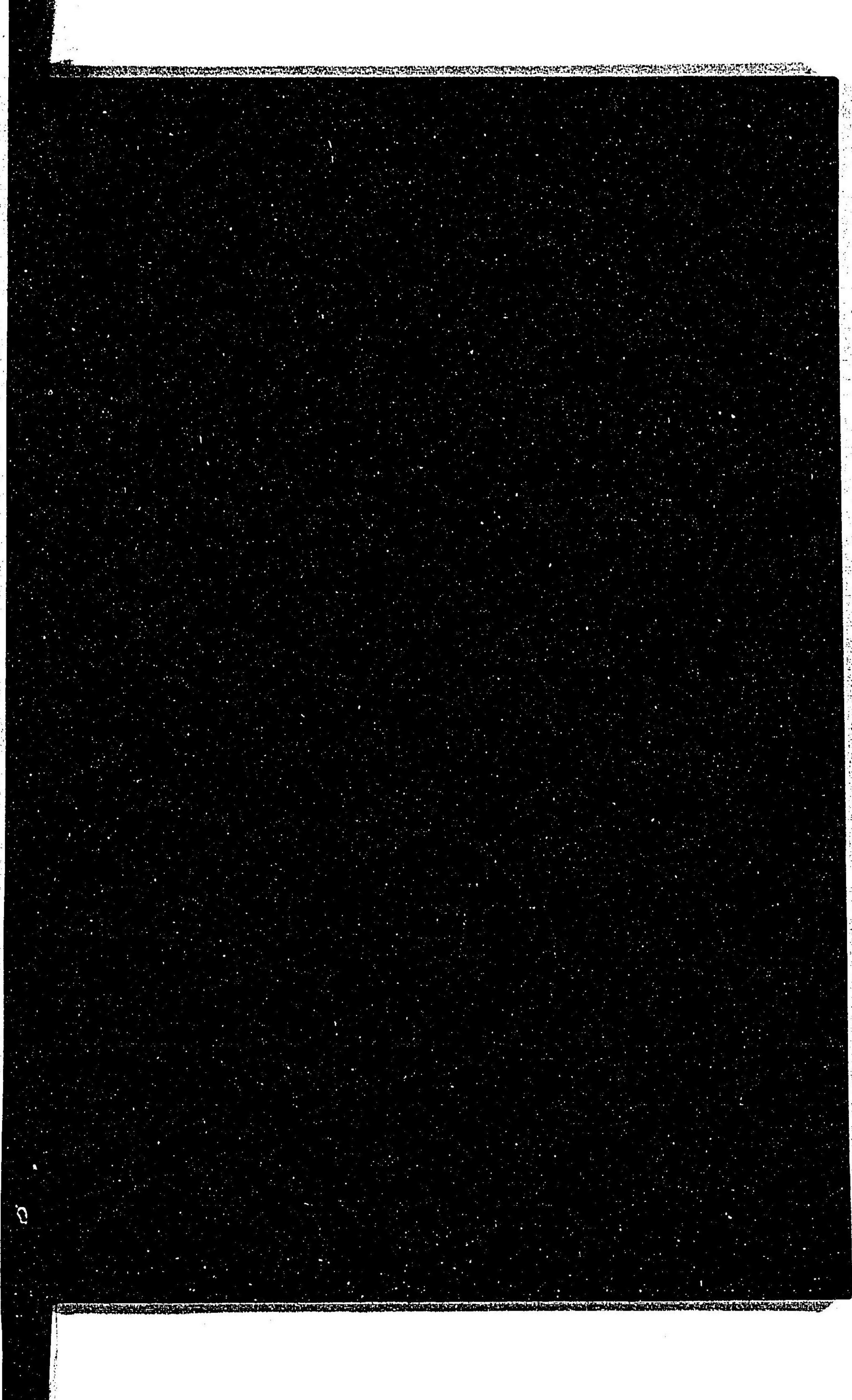
全一冊
紙皮上綴
三百八十二頁

正價貳拾錢 郵稅四錢

本書は受験實用として世界地理の要領を問答體に簡叙せしもの先づ初めに於て地理學綱領より天文地理、人文地理を詳明し、續て亞細亞、歐羅巴、亞非利加、南亞米利加、北亞米利加の四大區別を立ち章節數段に分ちて、難解の問題を明瞭に解答せり。此種に關する得籍世に少なからざるも親切に學生の實用を目的とし、この本書を措て他に求むべからず。故に學生諸君は此書に就て研讀せば僅少の時間を以て世界地理の要領に精進するを得べし。

2





23
257

(M)

023138-000-7

23-257

本邦地理詳説

中村 士徳

大久保 千濤 / 著

M39

ADB-1170



